

<研究ノート>揚雄論

雑誌名	日本研究
巻	11
ページ	59-97
発行年	1994-09-30
その他の言語のタイトル	The Hidden Profile-A Study of Yang Xiong (53 B.C.-A.D. 18)
URL	http://doi.org/10.15055/00000828

〈研究ノート〉

揚雄論

多田伊織

都の榮華をよそにひとり著作を續けた揚雄に、自らを重ねながら左思はうたう。⁽¹⁾

寂寂たり楊子の宅
門に卿相の輿無し

人聲ひとつせぬ楊先生のお宅
門口には雲上人のくるまも見えぬ

寥々たり空宇の中
講ずる所は玄虚に在り

奥深いのはがらんとした家の中
講じておいでなのは太玄・虚無の道だ

言論は宣尼に準い
辭賦は相如を擬す

言論は孔子さまにならい
辭賦は司馬相如を手本とされる

悠悠たり百世の後
英名を八區に擅にせり

悠悠たり百世の後
遠く百世の後までも
先生の英名は世界中にとどろく
權勢にくみせず、世間に忘れられ、京師の殷賑の内にあって、揚雄の周圍だけはぼっかりと寂莫だ。後世の典型的な揚雄像である。

しかし、『漢書』揚雄傳をはじめとする作品・資料を元に、同時代の目から揚雄を語ろうとすると、その人物像も作品も、左思がうたったような一つの姿には収束しないもどかしさを覚える。辭賦作家として世に出ながら、後半生は「童子雕蟲篆刻之技」と決めつけ、作賦を退けた男。知識を持っていたのに、災異や符命を立身の具とする世の趨勢に背を向けた男。壯年には屈原の入水を批判し、老いては身を天祿閣から投じた男。文辭に、思想に、小學に優れた業績を重ねつつも、殆ど同時代人には理解されなかった男。揚雄と彼の作品、世の評價とは、常にちぐはぐだ。

こうした揚雄の混亂したイメージは何處からくるのか。『漢書』揚雄傳を中心に考えていきたい。⁽²⁾

揚雄傳の體裁は、『漢書』の中でも特殊だ。本傳の中心は作品とそれに付された序だ。揚雄の人となりをいきいきと傳える

逸話は、かえって傳贊で觸れられる。従って、揚雄傳の傳贊は『漢書』の中では異例の長さだ。⁽³⁾ 他の個人の傳では、本傳で事跡を語り、傳贊は短い贊語が添えられるのが體例だ。

また、『漢書』揚雄傳に收められた作品のうち、成帝に獻じられた四賦（甘泉賦・河東賦・長楊賦・羽獵賦）の配列は、時代的な齟齬を來す。

それは何故か。

班固は、揚雄本傳を承け、

贊に曰く、雄の自序爾か云う、

という。同じ措辭は、『漢書』司馬遷傳に見える。ちなみに司馬遷本傳は、『史記』太史公自序をほぼ全文襲っており、その後には班固は

遷の自敘爾か云う、而して十篇缺く、錄有り書無し、

と記す。

一方、顏師古は、先の揚雄傳贊に

法言目の前自り皆な是れ雄の本と自序の文也

と注する。

この傳贊の語に基づき、「揚雄本傳」は、「太史公自序」同様、揚雄自ら著わした、「自敘」と考えられてきた。

顏師古注よりも古い『文選』には、本傳に收めるもののうち、「甘泉賦」「羽獵賦」「長楊賦」「解嘲」を、序と共に收める。それぞれ別の序を検討すると、小さな相違を除いて、揚雄傳の序と一致する。⁽⁴⁾ これは、揚雄のテキストが改變を被らず、保存され

ていたことを示す。

そして、揚雄傳は、『漢書』の中でも成立が早い。傳贊は「雄の没してより今に至るまで四十餘年」というが、揚雄は天鳳五年に七一歳で卒しているから、後漢明帝の永平年間、すなわち、班固が明帝に『漢書』編纂を許された時期にあたる。⁽⁵⁾ 既に、父班彪は建武三十年に没している。従って、傳贊は班固の手になる。この後、二十餘年にわたり、『漢書』の執筆は續けられ、一應の完成を見たのは、章帝の建初年間だった。

このことから、私は、揚雄の本傳は「揚雄自序」、すなわち現在の本傳に近い形で單行していた、揚雄自身の編纂になる別集であり、班固がそれを引用したと考える。そして、『漢書』とは別に、少なくとも『文選』編纂の時期まで、當初の形を保って單行していたかもしれない。⁽⁷⁾

では、「自序」とは何か。その最古のものは、言うまでもなく、『史記』成立の事情と執筆の経緯、各々の篇を贊し、司馬氏の歴史と併せて司馬遷が書き起こした「太史公自序」だ。

『史記』最後の卷に當てられている。當時、「序」は卷末に付された。揚雄の「法言」は、最後に「序」を付す。ただし、現行「法言」序は各篇の贊のみで、本傳では篇目の前で述べる執筆の動機を闕く。また、同様に今本『太玄』も、本傳に見える序を闕く。

一方、班固は、『漢書』敘傳で「太史公自序」の體裁を踏襲している。また、班固より數歳年長で、班彪に師事した王充の

『論衡』も、同様の「自紀篇」をもつ。⁽⁸⁾先に注に引いたように、劉知幾は、「太史公自序」の形式、すなわち、著書の最後に自らの系譜と執筆の動機、贊を記すスタイルを、「自序」の體例とする。

揚雄の本傳は、揚氏の出自を説き起こし、揚雄の文學觀學問觀を絡めながら、生涯の事跡と作品とを年代順に挟み、『法言』の目録に終る。作品には、序を付し、あるいは跋を加え、作品成立の事情と作者の意圖を述べる。

他の「自序」との根本的な相違は、「揚雄自序」が、ある著作の最後に付されたものではなく、揚雄の別集の體裁を成していることだ。つまり、個々の作品に付した「序」を集めたものが「揚雄自序」ということになる。これは他に例がない。

しかるに、『漢書』藝文志に「揚雄自序」は見えない。別集の概念もない。藝文志は、揚雄の作品をそのジャンルごとに分けて収める。揚雄の別集は、『隋書』經籍志に「漢大中大夫揚雄集五卷」と見えるのが最初だ。

しかし、藝文志に見えないのは、班固は劉向父子の『七略』に據り、それを増補する體裁を取っているからである。だからこれが「揚雄自序」の存在を否定する充分な根據にはならない。ちなみに、揚雄の作として『七略』を収めるのは、小學類の「訓纂」篇 揚雄作」と詩賦略の揚雄四賦のみだ。『七略』完成の時期には、まだ揚雄の著作は續いている。後に班固は、小學類に「揚雄倉頡訓纂篇一篇」、諸子略儒家類に「揚雄所序三十

八篇 太玄十九、法言十三、樂四、箴二」、詩賦略に更に八賦を加えた。⁽⁹⁾

従って、個人による別集が果たして前漢から新の閒まで溯れるかという問題はあるが、『漢書』揚雄傳の本傳は「揚雄自序」をもとにしたものだと考えていいだろう。⁽¹⁰⁾

では、現『漢書』揚雄傳は「揚雄自序」そのものだろうか。揚雄の作品の内、『漢書』に見えず、『文選』に取られている作品に、「劇秦美新」がある。揚雄は新に仕えているが、後漢の臣班固が『漢書』に新を贊美する文辭を載せることはできない。また、本傳では「文多不載」などとして、『廣騷』「畔牢愁」『太玄』『法言』の本文を省略する。省略は、あるいは「揚雄自序」で、揚雄の手によってなされた可能性もある。本傳に載せる『太玄』『法言』の序が今本とは異なるのは先に述べた。そして、『漢書』には、他に、趙充國傳に「趙充國頌」、遊俠傳陳遵傳に「酒箴」の一部、匈奴傳下に哀帝建平四年の「上書諫母許朝單于」、元后傳に王莽始建國五年の「元后誅」の一部を載せる。藝文志については、先に述べたとおりだ。故に班固が利用した「揚雄自序」は、いまよりも長いものであったろう。⁽¹¹⁾

自序は、自らを語る行爲だ。『史記』以來、世に容れられなかった屈原の自序として讀まれている「離騷」。腐刑を甘受し、恥辱に満ちた後半生を耐え、『史記』を書き上げた司馬遷の「太史公自序」。一度は獄に下され、『漢書』編纂を許された班

固の「敘傳」。孤高の思想家であつた王充の『論衡』自紀篇。それぞれの「自序」には、運命に抗い、世に對して己を語らねばならない、抜き差しならない動機がある。⁽¹²⁾ 悲運は中國においては文學の母胎である。

揚雄はどうか。彼の一生は、ことごとくに意表を裏切る運命、惡意ある誤解、無理解に苦しめられ通しだつた。

そして、王莽の新的始建國三年、六四歳の揚雄に最大の危機が襲つた。

話は、前年に溯る。符命に據つて、漢の讓りを受け、天子の位に即いた王莽は、始建國二年、地位の保全をはかり、神秘性を増すために、自らが五威將を通じて全國に公布した符命以外のものを禁じる。⁽¹³⁾ しかし、腹心であつた甄豐の子尋は、重ねて符命を作り、王莽の怒りと疑いを招き、ことは大疑獄事件へと發展した。甄豐は自殺、尋も翌年捕らえられ、王莽政權成立の立役者劉歆の子棻以下、當時の有力者全てを巻き込む。一切の辯明は許されず、「牽引公卿黨親列公以下、死者數百人」という、嚴しい追求が行われた。⁽¹⁴⁾

追求の手は、遂に揚雄に及んだ。⁽¹⁵⁾

王莽の時、劉歆甄豐 皆な上公爲り。莽 既に符命を以て自ら立つ。即位の後 其の原を絶ちて以て前事を神せんと欲す。而れども豐の子尋 歆の子棻 復たこれを獻ず。

莽 豐父子を誅し、棻を四裔に投じ、辭の連及する所、便ち收めて請わず。時に雄 天祿閣上に書を校す。治獄使者

來り、雄を收めんと欲す。雄 自ら免るる能わざるを恐れ、乃ち閣上從り自ら下に投じ、幾ど死せんとす。莽 これを聞きて曰く、雄 素より事に與らず。何の故にか此に在る、と。閒に請いて其の故を問うに、乃ち劉棻 嘗て雄に従いて奇字を作るを學ぶも、雄 情を知らず。詔 有り 問う勿れ、と。

揚雄は小學に精通して、字書『訓纂篇』『揚雄倉頡訓纂篇』、また、中國最古の方言集『方言』の著がある。⁽¹⁷⁾ 班固は、彼の學識を、同時代人谷永と比較する形で、⁽¹⁸⁾

永 經書に於いて、汎そ疏達爲り、杜欽杜鄴と略ぼ等しきも、劉向父子及び揚雄の如く洽浹たること能わざる也、と、劉向父子にならぶものとしている。また、谷永と同等と認められた、杜欽、杜鄴は、その傳に據れば、⁽¹⁹⁾

初め、鄴張吉に従いて學ぶ、吉子竦 又 幼くして孤、鄴に従いて學問するも、亦た世に著わる、尤も小學に長ず、鄴子林、清靜にして古を好み、亦た雅材有り、建武中位を歷し卿に列なり、大司空に至る、其の文字を正すこと竦に過ぐ、故に世の小學を言う者は杜公に由る、

當時の小學の大家である。なお、許慎『說文解字』は、師賈逵ここに名の見える杜林に次いで、揚雄の説を十三回引用する。

また、引き合いに出されている張竦は、陳遵傳では陳遵に「酒箴」で石頭ぶりをからかわれている。そして、王充によれば、張竦は、揚雄を輕んじていたと言ふ。⁽²⁰⁾

一方、劉歆は、數少ない揚雄の理解者である。その子菜に、事情を知らず問われるまま、符命に用いる奇字を教えたのが思わぬ災いを招いたのだった。

かつて、哀帝の治世、『太玄』を著す揚雄がさっぱり出世しないのを嘲った世間に、揚雄は「解嘲」で答えた。⁽²¹⁾ まず、客の口を借りて、世間の言い分を並べる。

客 揚子を嘲りて曰く、吾聞く、上世の士は、人の綱人の紀たり。生れざれば則ち已む。生るれば則ち上は人君を尊び、下は父母を榮えしめ、人の圭を析き、人の爵を擔い、人の符を懷き、人の祿を分ち、青を紆い紫を挖き、其の轂を朱丹にす、と。

男と生まれたからには、人の手本となり、君に忠に仕え、兩親の名を擧げ、立身出世して赤塗りの車に乗るほどの榮耀榮華を極めるべきだ。

そして、非難の矛先は揚雄に向く。

今 子 幸いに明盛の世に遭い、不諱の朝に處り、羣賢と行を同じゅうし、金門を歷し 玉堂に上るを得ること 日有り矣、曾て一奇を畫し、一策を出し、上は人主に説き、下は公卿に談じ、目は耀ける星の如く、舌は電光の如く、壹に従し壹に衡し、論ずる者當たる莫き能わす。

榮えめでたい世に、諫言に耳を傾ける明君を戴き、居竝ぶ臣下は賢人揃いというお膳立て、そこにあなた揚雄は官を得て久しい。しかし、秀れた獻策をして、一朝を説得したり、眼光人を

射、巧みに辯舌を振り、情勢に柔軟に對應すると言った業績は、今までなにもない。

揚雄は「口吃りて劇談する能わす」と自らい、桓譚は「容貌人を動かす能わす」と語っている。議論は、實際不得手だったろう。⁽²²⁾

官途では華々しい成果も擧げずに、いったい何をしているかと言え

ば
顧だ、太玄五千文を作り、支葉は扶疏として、獨り十餘萬言を説く。深き者は黄泉に入り、高き者は蒼天に出で、大いなる者は元氣を含み、纖なる者は無倫に入る。然れども位は侍郎に過ぎず、擢せられて纔に給事黃門たり。意者玄尙お白きこと母きを得ん乎、何爲れぞ官の拓落たる也、と。⁽²³⁾

『太玄』五千字を著し、論をひろげ、十萬言を超える大議論。その内容は、黄泉に至るほど深く、蒼天に抜き出るほど高く、天地の根源たる元氣を含む大きさになれば、極微のこまやかさにもなる。とはいえ、位は侍郎に過ぎず、拔擢されて、やっと給事黃門というありさま。思うのですが、太玄は黒いと言うけれど、まだ極め足らなくて白いんじゃないでしょうか。どうしてあなたの徳と官位とは釣り合わないのでしょうか。うね。

言いたい放題の世間に、揚雄は應ずる。

揚子笑いてこれに應えて曰く、客 徒に吾が轂を朱丹にせんと欲して、一たび跌けば將に吾の族を赤くせんことを知らざる也、

「あなたは私を朱塗りの車に載せ、出世をはかろうとするばかりで、一旦失敗したなら、私の一族が皆はふられてしまうことを、分かっていないのですね」

と、時流に迎合して立身出世に汲々とする危うさを笑い、且つ我これを聞く、炎炎たる者は滅び、隆隆たる者は絶ゆと。雷を觀 火を觀るに、盈爲り 實爲り、天其の聲を收め、地其の熱を藏す。高明の家は、鬼 其の室を瞰^{うかが}い、攫拏たる者は亡び、默默たる者は存す。位を極むる者は宗危く、自ら守る者は身を全うす。是の故に玄を知り 默を知りて、道の極を守り、爰に清 爰に靜、神の廷^{てい}に遊び、惟れ寂 惟れ莫、徳の宅を守る。世異なり 事變ずれども、人道殊ならず。彼我 時を易えなば、未だ如何を知らず。今 子 乃ち 鷗鼻を以て鳳皇を笑い、蠅蜓^{いんてい}を執りて 龜龍を嘲けるは、亦た病めるならず乎 子 徒^{いと}に吾が玄の尙お白きを笑うも、吾も亦た子の病の甚しくして、叟^{そう}與附扁鵲に遭わざるを笑う、悲しい夫^{おな}。⁽²⁴⁾

盛者必滅は世の習い、『太玄』を著して、默々と、清く心靜かに過ごし、徳を修め、心を自由な境地に通わせ、萬世不易の人の道を極め、一生を全うするのが一番だ、世が世なら聖人として私に叶わぬかも知れないではないかと言ひ放ち、低い官位に甘んじて生きる揚雄を嘲った世間の態度こそ、死に至る病と一蹴した。しかるに今は、あれほど避けていた政争の餘波がわが身を危うくする。

皮肉なことに、「投閣」は、現實の政治の中では、いくつかの文辭と上書、『訓纂篇』の編纂位しか事跡のなかった揚雄のもつとも目を引く行動だった。しかし、逃げおおすことも、自ら死ぬことも叶わない。そのうえ、かつての同僚であり、年老い、さしたる官位でもないことを斟酌してであろう、王莽は揚雄を許す。ことごとく揚雄の意思はねじ曲げられ、誤解を呼ぶ。「解嘲」の低徊と現實の揚雄の姿の乖離をここぞと京雀は囁し立てる。

然るに京師 これが語を爲して曰く、惟れ寂莫、自ら投閣し、爰に清靜、符命を作る、と。⁽²⁵⁾

「ひっそりしずかにいて、徳のある状態を守るだって？ 天祿閣から身投げが落ち。清く心靜かにすごして、天の神々と心を通わせるなどと勿體ぶっていたくせに、その實符命を作っていたとはね」と、「解嘲」のパロディで、人々は明日はわが身に及ぶやも知れぬ恐怖を笑い飛ばした。黒い笑いの主は、難しくて譯の分からぬ『太玄』を書いた揚雄だ。

一方、「投閣」は、文辭の人、揚雄の來し方行く末を根本から揺るがす。「解嘲」の一件が示すように、己れの作品の一語一句が、無慘な老いの身を曝した揚雄自身に突き刺さっただろう。

三十歳前後、仕官前に著した「反離騷」では、孔子の處世に觸れ、入水した屈原の性急を詰った。

夫れ聖哲の遭わざる

固より時命の有つ所
歎を増ね以て於邑と雖も

吾は靈脩の累に改めざるを恐る

昔仲尼の魯を去るや

斐斐遲遲として周邁し、

終いに舊都に回復せり

何ぞ必ずしも湘淵と濤瀨のみならんや

漁父の舖歎を瀝るとし、

沐浴の振衣を潔しとし、

由厠の珍ずる所を棄て

彭咸の遺せる所を蹴まんとは

聖人孔子でさえ、時命に逆らうことはできずに、後ろ髪を引かれつつも、一度は魯の國を出た。「去魯、曰遲遲吾行也」とは、『孟子』萬章下に見える。しかし、孔子は、絶望せず、己れの信ずる道を行ない、再び國都を踏む。『孟子』は評している。「可以速而速、可以久而久、可以處而處、可以仕而仕、孔子也、孟子曰、……孔子聖之時者也」、孔子は、出處進退の「時」をわきまえた聖人であると。然るに屈原は、漁父の勧めを潔しとせず、わが道に固執し、死を選ぶ。「隱」は、許由老子の道であつたのに。

「反離騷」の通奏低音は、人間の不斷の努力に對する、善意ある肯定である。孔子は言つたではないか。

吾試られず、故に藝なり、

これは、自嘲の語ではない。そして、『論語』は、次の言葉で締めくくられる。⁽²⁷⁾

命を知らざれば、以て君子と爲す無き也、

「命」、天から與えられた自らの運命使命に遵うのが、「君子」である。「遇不遇は命也」は、消極的な言ではない。さればこそ、若き日の揚雄は、言を盡して、屈原の行動を責めねばならなかった。

そして、今他ならぬ揚雄が、自ら天祿閣から身を投じた。高所から落ちる人の腦裏には、一生のさまざまな場面が凝縮され、須臾の間に鮮やかによぎるといふ。

時は揚雄を翻弄した。時が、政治が、暴力的に襲いかかり、文辭の世界で培つて來た揚雄の全てを呑み込み、おもうさま蹂躪した。時命と文辭、辭賦と『太玄』以下の著作。晩年に至つて、揚雄は自分のテーゼと人生との再檢討を迫られたのだ。

「投閣」は、あらゆる意味で揚雄のもっとも深刻な轉機だった。「自序」はこの後に記されたのではないだろうか。

さて、「投閣」の後、辛くも死を免れた揚雄は、自らの作品をもう一度整理し、文辭に生きたおのが生涯を振り返つたとして、本傳を見よう。

雄 少き時 學を好む。章句を爲めず、訓詁して通ずる而已。博覽にして見ざる所無し。人と爲りは簡易（さっぱり） 佚蕩（こせこせせず）、口吃して劇談する能わず、深

湛の思を好む。清靜にして爲す亡く、奢欲少し。富貴に汲汲とせず、貧賤に戚戚（あくせく）せず、廉隅を修めて、以て名を當世に倣（な）めず。家産は十金に過ぎず、乏しくて儋石の儲無きも、晏如たる也、自ら大度有り、聖哲の書に非ずんば好まざる也、其の意に非れば、富貴と雖も事えざる也。顧（た）だ嘗て辭賦を好む。

學問好きだが、煩瑣な議論には渡らず、相當の讀書家だった若い頃。性格はさっぱりしていて、こせこせしないが、言語障礙のために、活潑な議論は苦手だ。だから、ひとり黙然と思いを凝らす方が良かった。「解嘲」でも述べ、かえって言葉尻を取られもしたが、「清靜」はもとからわたしの信條、これといったことを起こさず、何が欲しいといったこともない。金持ちになりたいとも思わないし、貧乏が苦痛でもない。ことさらに身を修めて、世の評判を集めるのにも興味はない。すつからかんの貧乏だが、氣にも留めない。ただ、大きな志だけはいつもあった。聖人の書を熱愛し、所信に合わない者は、金持ちだろうが、身分が高かろうが、相手にしなかった。そう、昔、辭賦を愛したことがあったなあ。

辭賦の名手には、なぜか言語障礙に悩む人が目につく。司馬相如は「口吃して著書を善く」し、後の左思も「顔寢く、言訥（だ）りて、辭藻壯麗、交遊を好まず、惟だ閑居を以て事と爲す」と、揚雄そっくりだ。

しかし、青年期の揚雄は、晩年の彼が言うように、寡欲恬淡

とした諦念を自然に身につけていたのだろうか。そうではなからう。障礙は、しばしば人を頑固にする。わが身は意の儘にならず、頼りになる筈の自分がいちばんあてにならない。自我を傷つけるのは、わが身の情けなさだ。賽の河原の石積みにも似た、自我の崩壊と再建の闘いは、一生続く。他人は我を異形・異様なものと見、まともに理解しようとさえしない。そうして、「私」は孤獨に追い込まれ、狹隘な自意識の檻に籠り、世に背を向ける。

知性は惡意に聰い。揚雄はとぼけているが、彼の「默」は、負けず嫌いの激しい沈黙だ。言葉を口に出して失笑を買うよりも、初めから黙っていた方がよい。「清靜」は、己を絶望から守り生き抜く爲の、やむを得ない選擇だった筈だ。だからこそ、「自ら大度有り、聖哲の書に非ずんば好まざる也、其の意に非れば、富貴と雖も事えざる也」と大見得を切らなければならぬのだ。

そして、貧困。後に卓文君のおかげで裕福になった司馬相如とはここが違う。孔子の高弟顔回は、生涯を極貧に送り、「其の樂しみを改め」なかつた。⁽³⁰⁾揚雄と貧乏も、一生縁が切れなかつた。居座る貧乏神を追い出そうとする「逐貧賦」は、揚雄の作とされる。

「顧だ嘗て辭賦を好む」と、揚雄は、辭賦作家だった頃の自分を客體化した口ぶりだ。裏には、辭賦によって身を立てようとし、果たせなかつた彼の挫折が隠れている。しかし、揚雄は、

あくまで、敗北を敗北としては認めない男である。

是の時に先んじ、蜀に司馬相如有り、賦を作りて甚だ弘麗
溫雅たり。雄 心にこれを壯んにして、賦を作る毎に、常
にこれに擬して以て式と爲す。又 屈原の文の相如に過ぐ
るも容られず、離騷を作り、自ら江に投じて死するに至る
を怪み、其の文を悲しみ、これを讀みて未だ嘗て涕を流さ
ざるはなき也。以爲く君子 時を得れば則ち大いに行み、
時を得ざれば則ち龍蛇たり、遇 不遇は命也。何ぞ必ず身
を湛めん哉。

故郷蜀の先人司馬相如の「弘麗溫雅」な作風を手本に、揚雄
は作賦に勵む。辭賦をわがものとするために、揚雄は、先行作
品を徹底的に擬作した。のち、桓譚に作賦のこつを問われた揚
雄は、「能く千賦を讀めば、善く之を爲す矣」と答えている⁽³¹⁾。

「千賦」というのは言葉のあやにしても、同時代の藝文志が收
める辭賦は、千餘。天下の辭賦でおのが目にふれないものはな
かった、という自負の言葉だ。

もうひとり氣にかかるのは屈原。司馬相如よりもすぐれた文
章を書いた彼は、楚王に容れられず、悲嘆して「離騷」を作り、
入水し果てたそうだが、どうしたことか。「楚辭」を讀むと、
悲しみが胸に迫り、いつも泣いてしまう。

揚雄の涙は、ありきたりの感傷からだけではないだろう。讒
言に遭い、「信にして疑われ、忠にして謗れ⁽³²⁾」進退窮まり、怨
みが「離騷」を生んだと言われる屈原の状況は、自分の肉聲が

他人に届かない揚雄に近い。しかし、屈原の場合は、讒言とい
う外的條件が意思の疎通を妨げるのだが、揚雄は自ら言う能ざ
る身の上なのだ。屈原は、身の證を天に求め、入水する事でも
きよう。しかるに、揚雄の言語障礙も、貧困も、誰のせいでも
ない、彼が背負って行くべき運命なのだ。かつて、惡疾に罹つ
た善人伯牛を、孔子は見舞つて言つたではないか。「命なる矣⁽³³⁾
夫、斯の人にして斯の病有り」と。

揚雄はいう。君子は、時流にかなえば、何の障害もなくわが
道を行けるが、そうでないときは龍や蛇のようにじっと身を潜
めて機會を窺うべきだ。⁽³⁴⁾時流に遭う遭わないは天命だ。身投げ
などせずともよかつたものを、と。人生を支配するものは、才
能、節操にかかわらず、「時命」なのだ。

「時命」は、優れた人物が、必ずしも、幸福とは限らず、む
しろ才能を活かす機會に恵まれないままに終わる、世の矛盾へ
の解答の一つだ。聖人孔子さえ、一生は不遇であつた。「淮南
子」はいう、「得は時に在りて、争には在らず、治は道に在り
て、聖には在らず⁽³⁵⁾」と。揚雄は、いま不遇のまま人生の黄昏を
迎え、「投閣」という生き恥を曝している。

かつて、揚雄は成都から少し離れた岷山から「反離騷」を江
に投げ入れ、屈原を弔つた。⁽³⁶⁾「反離騷」は、措辭の點からは、
「離騷」を中心に「楚辭」諸篇の句をほぼ襲つたものであり、
屈原を弔う形式は、賈誼の「弔屈原賦」に次ぐ。賈誼の作が、
長沙に流される途中に、おのが境遇を、屈原に重ね合わせて作

られたものであるのに對し、「反」というごとく、揚雄の篇は、徹底して、屈原を難詰する。

懿³⁶しきかな神龍の淵に潛みて

慶³⁷雲を俟ちて將に擧らんとするは

春風の被離亡くんば

孰か焉んぞ龍の處る所を知らん

身を潛め、時を待つ龍を風が呼ぶ。「春風之被離」とは、龍が春の獸であるからだ、吹き渡る春風を受けて、萬物は成長する。雲に乗り、天を駈けるであらう龍の前途に對する信頼を感じさせる。「潜龍」は、無位無冠の揚雄そのひとでもあるだろう。

時に成帝の陽朔の年、揚雄は、三十そこそこだった。

漢十世の陽朔

招搖は周正に紀す

「周正」とは、十一月。「太玄」では、「中」の初一「昆侖 旁薄、幽なり」にあたる。³⁸それととらえることのできない天は、あらゆるものを包み、ひろびろとした地は全てのものを載せる。奥深い天道はかすかで隠れていてはかり難い。

四時はここから始まる。そして、揚雄の文辭による人生もこれからだ。

實は、「反離騷」は、揚雄傳の中でも、それほどおもしろいものではない。後の文學評論家、劉勰は、賈誼の「弔屈原賦」と較べて、

賈誼の湘に浮んで自り、憤を發して屈を弔う。體は周にして事は憂、辭は清くして理は哀なり。蓋し首出の作也、……揚雄の屈を弔いしは、思い積むも功寡なく、意は反騷に深く、故に辭韻は沈脰³⁹す。

と、賈誼の作が、作者の深情に沿い、文辭趣旨ともに優れるのに、揚雄は、「こころあまりて、ことばたらず」、屈原を攻撃するのに急で、文辭がたどたどしい、と評する。完成度からは、劉勰の評は的を得ている。

しかし、揚雄は敢えて、「反離騷」を「自序」に組み入れている。揚雄の他の『楚辭』の擬作である、「廣騷」「畔牢愁」が省略されているのは、あるいは既に揚雄の手によってでなかったのか、と先に疑義を述べた。「時命」をテーゼとする「反離騷」と單なる擬作では、作品に對する態度がまるで異なる。

さらに、揚雄の「反離騷」には、二つの特徴がある。

一つには彼なりの新しい觀點を据えている。「漁父」以來、屈原の行動を反駁する諸篇は、思想的には、黃老—道家の流れにくみする。そこに、儒家の要素を融合させたのが、揚雄の「反離騷」である。

二つには、文體の選擇である。漢代、『楚辭』の擬作は多く作られる。しかし、朱熹が『楚辭辯證』に、

七諫九懷九歎九思は、騷體を爲すと雖も、然るに其の詞氣は平緩、意は深切ならず、疾痛する所無くて強いて呻吟を爲す者の如し、

と評するように、形式だけでなく内容も『楚辭』の物語に安易に寄りかかった、「悲嘆のための悲嘆」だった。一方、揚雄にあっては、擬作は、單なる模倣ではない。『楚辭』の言語を襲いつつ、廣く典故を用いる。「内容」、儒教のタームで言えば「質」を盛る器として、意識的に『楚辭』の文體が選ばれたのである。⁴⁰⁾

「反離騷」は、「時命」を人生の要諦とし、先に引いた『孟子』の言を用いれば、「處」と「仕」とはオルタナティブな選擇である、と説く。揚雄は、ここで、學識を基礎に、儒學と黃老との融合を文學の上に實現しようとしている。時代思想は、まさにその状況にあった。その意味で揚雄は、すぐれて、漢代的なひとである。

『楚辭』擬作の取捨は、「自序」が投閣以降の揚雄の編集と考え得る傍證になるだろう。

やがて、揚雄は、文辭が司馬相如に似ているとして、成帝に推舉された。

成帝期は、二つの意味で、劃期である。

一つには、儒教が、國家の支配原理として浸透した。宣帝は「漢家 自ら制度有り、本と霸と王道とを以て之を雜う、奈何ぞ純ら徳教を任い、周政を用いん乎」と當時太子であった元帝を詰り、「我が家を亂す者は、太子也」と嘆じたが、周制の復古は、漢家の滅亡、王莽の篡奪によって實現される、皮肉な結

果となった。

武帝が、董仲舒の獻策を受けて、儒教を國家の根本としてから百年餘り。董仲舒の學、春秋公羊學は、漢代儒學の主流である。孔子が編纂した、魯の歴史書『春秋』の記述から、微意を汲み取り解釋を施すのが、春秋學である。漢代の儒學は、その始めより、神祕思想への道を含む。その「天人相關説」は、災異を、人事に對する天の譴告として受けとめる。『春秋』の災異に對する解釋は、現在に適用される。

成帝期には、災異に對する關心が高まる。成帝の父、儒教好きの元帝のころから、『漢書』には、災異の記録とそれに對する羣臣の議論とが、目につくようになる。災異解釋は、當時の儒者の重要な役割であった。

そして、多くの災異が報告されている。天が皇帝の徳を讃えて降す瑞祥よりも、災異の方が遙かに多い。異様な印象を與える。

劉向は、成帝期の災異を統括して、『春秋』に鑑み、國家の危難を訴え、天子に反省を促す。彼の著、『洪範五行傳論』は、過去の災異に照らし、現在の譴告を見るに切である。その説は、現『漢書』の五行志に見る事ができる。また、當時、儒者として名を成す人物、杜鄴、谷永、李尋らは、皆、災異に解釋を下し、上書して、皇帝を直諫する。災異解釋からは、漢家の衰運は、明らかであった。

揚雄は、深い學識を備えた人でありながら、災異に對する發

言を餘り遺していない。⁽⁴²⁾ 同時代の谷永が、成帝に頻繁に書を奉り、災異を説くのと、好對照を成す。⁽⁴³⁾ しかし、彼自身が、災異に對する見識を備えていたのは、『法言』に災異に通じた人として、董仲舒、夏侯勝、京房の名を擧げる事からも窺える。⁽⁴⁴⁾

そして、禮制の整備にも關心が向かう。賈誼以來、漢王朝獨自の禮制を樹立することは、儒者の最大の懸案だった。黃老思想が「漢家之法」であり、漢の制度が「本以霸王道雜之」であるのは、純粹な儒學の立場からは、「紫之奪朱」にはかならない。そのひとつが、天子の行なう郊祀の問題であった。

「甘泉賦」「河東賦」の主題、甘泉泰時汾陰后土は、方士の進言に據って、武帝期に始められた天地の祭りである。成帝初年に、この二つの祭りは、禮制上の議論を呼んだ。甘泉泰時について言えば、天を祭るのに、長安の方角からみて、眞南ではなく、北にあり、泰陰にあたる事、經に明文がない事、長安から遠く、行路が危険な事、祭祀の舉行に、多くの時日と努力を費やす事が問題となった。⁽⁴⁵⁾ 匡衡らの建議により、甘泉泰時は汾陰后土や他の祠と共に一度廢され、かわって、長安南北郊が、正式な天地の祭りとなる。⁽⁴⁶⁾ しかし、廢止直後、甘泉の竹宮に大風が吹いて大木が抜ける災異が起くる。『漢書』には、劉向の言葉に、成帝が、廢止を後悔したように記されている。結局、成帝が後嗣に恵まれないために、永始四年、甘泉泰時は復活される。⁽⁴⁷⁾

また、大規模な圖書の整理校訂が、劉向を中心として、行な

われた。これは、儒學においては、經典の批判的校訂を意味する。

あわせて、それまでにあった辭賦が集められ、整理された。⁽⁴⁸⁾ もう一つは、外戚の跋扈跳梁である。帝母王太后、寵姬許氏

班氏趙氏の一族が、かわるがわる一朝の權勢を傾ける。前漢の滅亡、王莽の篡奪はこのときに準備された。

このような時代に、揚雄は、辭賦作家として歴史に登場する。彼の學識と文才は、災異の議論と直諫ではなく、まず、美文にして風諫の具、辭賦に向けられた。

後嗣に恵まらない成帝は、經に明文がないとして、即位後ほどなくして廢した、甘泉泰時、汾陰后土の祭を復活させる。

二つの祭に従った揚雄は、まず、「甘泉賦」を奉り、天子を諷諫した。「自序」は、「甘泉賦」の文辭に據りつつ、作賦の意圖を述べた跋を收める。⁽⁴⁹⁾

甘泉は本と秦の離宮に因り、既に奢泰たり。而うして、武帝復た通天・高光・迎風を増す。宮の外近くは則ち洪崖・旁皇・儲胥・弩阼あり、遠くは則ち石闕・封巒・枝鵠・露寒・榮黎・師得あり。遊觀は屈奇瑰璋、木は摩して彫らず、牆は塗りて畫かずんば非ず。周宣の考する所、般庚の遷す所、夏は宮室を卑くし、唐虞は椽三等の制あり。且つ其れを爲すや已に久し矣。成帝の造る所に非ず。諫めんと欲すれば則ち時に非ず、默せんと欲すれば則ち已

む能わず。故に遂に推してこれを隆にし、乃ち上は帝室紫宮に比べ、此れ人力の能くする所に非ず、鬼神に黨せば可也と曰うが若し。又是の時趙昭儀方に大いに幸せられ、甘泉に上る毎に、常に法従し、屬車の間豹尾の中に在り。故に雄聊か盛んに車騎の衆、參麗の駕を言い天地を感動させ、釐を參神に逆する所以に非ずとす。又玉女を屏け、妃を卻くと言いて、以て齊肅の事を微戒す。

秦始皇帝、漢武帝の手で、建築の粹を凝らし、この世に天界を再現したかと思ふばかりの甘泉宮。豪奢な宮殿は、質素を旨とし華美を排した聖王の忌むところだった。成帝が建築した譯ではないから、諫めるには時機を逸している。しかし、この奢侈を黙って見過ごすこともできない。道から逸脱した行爲を見捨てて置けない揚雄。一言多い男だ。つまりは世渡りが下手なのだ。

當時、成帝の後宮も亂れていた。微行で見いだされた宮人趙飛燕は皇后となり、妹は昭儀、一朝の權勢をほしきままにしていた。⁽⁵⁰⁾天に繼嗣の福を求めるというのに、寵愛の女性を侍らせているとは。揚雄は辭を盛んにして、甘泉園簿を『楚辭』に見られるような天界飛行に擬し、寵姫を神仙になぞらえて、それとなく天子の非をさそうとする。成帝は「異とす焉」、見事だ、とは感じたものの辭賦の美麗さに幻惑され、揚雄の本意は傳わらなかった。

甘泉泰時の時節は、『太玄』では「銳」の次四「時に銳、利

ろしからざる無し」にあたる。⁽⁵¹⁾進取は時宜にならっているから、すべてよい。ものみな生命を噴き出そうとする初春だ。續く汾陰后土の祭にも、揚雄は従い、賦を奏上した。

其の三月、將に后土を祭らんとして、上乃ち羣臣を帥て大河を横り、汾陰に湊く。既に祭る。行きて介山に遊び、安邑を回り、龍門を顧み、鹽池を覽、歴觀に登り、西嶽に陟りて以て八荒を望み、殷周之虚を迹い、眇然として以て唐虞の風を思う。雄以爲く川に臨みて魚を羨むは、歸りて罔を結ぶに如ず、と。還りて河東賦を上りて以て勸む。

祭の後、いにしえの聖王達ゆかりの地をめぐり、自らも徳をひとしくしたいものだと思ふ成帝に、ご自分で太平の治を興されるのが一番ですと、勧める揚雄。「河東賦」を讀んで、果たして、成帝はどう思ったのか。以後の賦には、成帝の反應は記されていない。しかし、歴史は、揚雄の諷諫がさっぱり實を結ばなかったことを示している。

后土の祭の時期は、『太玄』では、「更」の上九「其の徳を終えず。三歳にして代を見る」にあたる。⁽⁵²⁾綏和二年、后土の祭を終えほどなく、成帝は俄に崩じた。そして、外戚が漢家を食いつぶして行くのである。

「甘泉賦」「河東賦」は、題を祭祀に取ってはいるが、描寫の力點は祭祀そのものではなく、甘泉園簿や甘泉宮の贅を盡くした壯麗なさま、后土の後の成帝の巡幸に置かれている。主題以外の事柄に流麗な筆を揮い、現實よりも誇大に表現するのが、

揚雄の諷諫の手法だ。しかし、その表現の成功は、かえって意圖を誤解され、逆効果となる危険をはらんでいる。

「自序」では、四賦の三番目に置かれるのが、「羽獵賦」だ。しかし、傳贊には、

初め、雄 年四十餘り、獨自り來至して京師に遊ぶ、大司馬車騎將軍王音 其の文雅を奇とし、招じて以て門下史と爲し、雄を待詔に薦む。歲餘、羽獵賦を奏し、除せられて郎と爲り、給事黃門たり、王莽・劉歆と竝ぶ。

とあり、これが成帝に奉った最初の作品と考えられる。⁽⁵³⁾

季節は、春から冬へと移っている。甘泉泰畤と汾陰后土の春の天地の祭を主題にする二賦と成帝の田獵を扱う二賦とは、二つで一組で、いずれも四時の循環にしたがう天子の行事に取材し、生命の横溢する春と殺戮の冬とが對をなし、順に一年がめぐる構造になっている。

其の十二月 羽獵す。雄從う。以爲く。昔在二帝三王、宮館・臺榭・沼池・苑囿・林麓・藪澤は賤に以て郊廟に奉じ、賓客に御め庖厨に充つるに足る而已。百姓の膏腴 穀土桑拓の地を奪わず。女に餘布有り、男に餘粟有り。國家 殷富（さかえとみ）し、上下、交足る。故に甘露は其の庭に零り、醴泉は其の唐に流れ、鳳皇は其の樹に巢つくり、黃龍は其の沼に遊び、麒麟は其の囿に臻り、神爵は其の林に棲む。昔者 禹は益を虞に任じて、上下和し、山木茂る。成湯田を好めども天下の用足り、文王の囿 百里といえど

も、民 以爲く尙お小なりと。齊宣王の囿 四十里、民 以爲く大なりと。民を裕かにすると 民を奪うと也。

美しく、厳しい校獵のさまを眺めながら揚雄は思う。かつて堯・舜や夏・殷・周の三代の御代では、宮殿や庭園、山野を驅ける狩獵は、祖先にそなえ、賓客に嚮し、賄いにあてればそれで済んだ。民を收奪せず、國中がみなゆたかだった。だからさまざまな瑞祥が自然に到ったのだ。民をゆたかにする聖王の狩獵には、何の問題もなかった。禹しかり、湯王しかり、文王しかり。しかし、齊の宣王のごとく民から收奪すると、不満が聞かれた。

武帝 廣く上林を開き、南のかた宜春・鼎湖・御宿・昆吾に至り、南山に瀕いて西し、長楊・五柞に至り、北のかた黃山を繞り、渭に瀕いて東し、周表（まわり）は數百里、昆明池を穿ち、河を象り、建章・鳳闕・神明・馭娑を營み、漸臺・泰液は海水の方丈・瀛洲・蓬萊を周流するを象り、游觀 侈靡にして、妙を窮め麗を極む。頗る其の三垂を割きて 以て齊民を瞻すと雖も、然も羽獵の、田車・戎馬・器械・儲侍 禁禦の營む所に至ては尙お泰た奢麗 誇詡（おおがかり）にして、堯・舜・成湯・文王の三驅の意に非ざる也、又 後世 復た前好を修め、折中するに泉臺を以てせざらんことを恐る。故に聊か校獵賦に因りて以て風す。

そして、漢武帝は廣大な上林苑を開いた。その規模は前代未

聞、設備も豪奢の限りをつくし、昔の聖王の田獵の意義に背いている。このような當代を見て、後世の人は、奢侈に流れ、前代の豪奢を捨て置いて置いた泉臺の例を汲み取らなくなるのではないかと心配になった。これが、「羽獵賦」の諷諫の意圖である。

『太玄』では、「閑」の次四にあたる時節だ。「測」に曰く、我が輓軌を抜く、貴ぶに信を以てする也、民を治めるには、信をとうとぶことだ。⁽⁵⁴⁾

最後の「長楊賦」は、成帝の元延二年に、胡客をしたがえて行われた校獵を題材とする。⁽⁵⁵⁾しかし、序に

明年、上將に大いに胡人に誇るに禽獸多きを以てす。秋、右扶風に命じて民を發して南山に入らしめ、西のかた褒斜自り、東のかた弘農に至り、南のかた漢中に馭り、羅罔置罟を張り、熊羆 豪猪 虎豹狖(おながざる) 獾(てながざる) 狐菟 麋鹿を捕え、戴するに檻車を以てし、長楊の射熊館に輸し、罔を以て周陸(かこい)と爲し、禽獸を其の中に縦ち、胡人をして手ずからこれを搏ち、自ら其の獲を取らしめ、上親臨觀す焉、是の時農民收斂するを得ず。雄従いて射熊館に至り、還りて長楊賦を上る。

とあるように、收穫期の農民を徵發して、獵の準備が行われたため、農民達は取り入れができなくなりました。本文では、子墨客卿の口を借りて、

然りと雖も、亦た頗る農民を擾すこと、三旬有餘。其の産

(つとめ)至れり矣、而も功圖らず。

と、その勞役は一月餘りも續き、しかも農民の本來の勤めは果たせず、一年の業が徒勞に終わつた事を言う。

これは、天の氣を亨け、四時に順い、民を司る天子のなすべき所行ではない。揚雄は筆と墨を主人と客とに見立てた問答體で、このたびの校獵を諷する。何焯は、この二賦の體を、「羽獵賦」は「上林賦」の擬作、「長楊賦」は「難蜀父老」の擬作であると評する。⁽⁵⁶⁾

農民が徵發された時期はあきらかではないが、校獵が多に行われ、その一月以上も前と言え、秋分の頃だろうか。『太玄』では、「節」の次七「言う時に丁らず、辭に微なり、上に疑わる、測に曰く、言う時に丁らず、何ぞ章らかにす可けん也」にあたる。直言すべき時ではない。微辭を以て、諷諫すべきだ。はつきりものを言え、眞意は理解されず、君に疑われる。⁽⁵⁷⁾

そして、辭賦による揚雄の諷諫も「長楊賦」をもって終わりを告げる。

周正から秋の終わりへ、そして冬の校獵。揚雄がうたった辭賦の四時はひとめぐりした。五つの賦は、四時の循環に沿って、竝べられ、天のめぐり、人の世のいとなみを封じ込め、永遠の時間に歸する。

「反離騷」から「長楊賦」へ至る作風は、屈原の擬作から、司馬相如流の華麗な辭賦による諷諫、そして更に諷諫の意を強調する主客問答の體へと移る。これは、揚雄の意圖的な編集だ

ろう。

本傳では、「長楊賦」の後に、直接「解嘲」序が置かれる。この間に挟まれるべき「酒箴」「趙充國頌」にはふれず、辭賦の愛好者成帝の死には、言及されない。

哀帝の時、丁傳、董賢事を用い、諸のこれに附離する者、家より起りて二千石に至る。時に雄方に太玄を草し、以て自守泊如たる有る也。或ひと雄を嘲けるに玄の尙お白きを以てす。雄これを解き號して解嘲と曰う。

かつての同僚、寶賢等の榮華をよそに、揚雄は『太玄』の執筆に專念する。作風は、一轉し、東方朔が「滑稽」から、プラクティカルな政治家をめざし、武帝に受け容れられなかった後の作、「答客難」を襲うものとなる。文體は、「長楊賦」に續き、主客問答の體だ。作品は、現實の政治に對するアプローチの具ではなく、「自守」の辯護をする。「解嘲」で觸れられた、宦に就きながら出世榮達を望まない態度、所謂「朝隱」は、以後、揚雄の生き方となる。辭賦によって立つ事の叶わなかった揚雄の挫折である。言葉も行動も、またしても思うようには受け取られなかった。「清靜」に續き、「朝隱」も同じく、やむを得ずして擇られた生き方だったのだ。

「自序」はいう。

雄以爲く賦なる者は、將に以て風せんとする也。必ず類を推して言え、麗靡の辭を極め閑修鋸衍、人をして加うること能わざら使むるを競う也。既に乃ち之を正に歸する

も、然れども覽る者已に過てり矣。往時武帝神仙を好み、相如大人賦を上り、以て風せんと欲す。帝反つて嫖嫖として陵雲の志有り。是に繇りて之を言え、賦は勸めて止まざること、明かなり矣。又頗る俳優淳于髡優孟の徒に似、法度の存る所、賢人君子の詩賦の正に非ざる也。是に於いて輟めて復た爲さず。

揚雄は、過度の修辭のために、諷諫の效用を果たさず、むしろ、逆効果となる辭賦のあり方に疑問を抱き、以後、作賦の筆を折った。この部分は、はじめの「顧賞好辭賦」と呼應する。すなわち、「自序」は、「顧賞好辭賦」と辭賦論とが一つの枠になり、その中に辭賦を圍い込む構造となっている。

『法言』で揚雄は言う。

或ひと問う。吾子少くして賦を好めるか、曰く、然り、童子の雕蟲篆刻、と。俄にして曰く、壯夫は爲さざる也、と。或ひと問う、賦は以て諷す可き乎。曰く、諷乎。諷すれば則ち已む。已まざれば、吾れ勸むるを免れざるを恐るる也、と。或ひと曰く、霧縠の組麗か、と。曰く、女工の蠹矣、と。

「雕蟲」を、汪榮寶は、『說文解字』敍に見える、繁雜な書體「蟲書」に解す。⁽⁵⁹⁾ さすれば「雕蟲篆刻」は、文字の機能が傳達にあるとすれば、勞多くして、實り少ない小手先の技であり、文章における辭賦は、その表現の過度の修辭性により、大道に通じ得ないものとして、文字におけるそれらに當る。

修辭の美しさは、薄いレース編みのように、繊細華麗に見えるが、女性本来の仕事を損なうもの、雕蟲篆刻に類するものではない。ここには、『淮南子』齊俗訓にみられる、

夫れ雕琢刻鏤は、農事を傷る者也。錦繡纂組は、女工を害う者也。農事廢れ、女工傷らるれば、則ち飢の本にして寒の原也。

奢侈、つまり過度にアーティフィシャルなものへの戒めが反映しているだろう。それは、成帝に奉った四賦での、諷諫の主眼であったのだが。

さて、『禮記』曲禮上には、「三十日壯」とある。今見たように「反離騷」は三十歳前後、「七略」に取られる成帝期の「甘泉賦」「河東賦」「羽獵賦」「長楊賦」の四賦は、四十代前半の作である。彼の辭賦は、實は「壯夫」の作であった。しかし、成帝詔して甘泉賦を作らしむ。卒暴（にわか）に遂に倦臥し、五臟地に出で、手を以て之を内に收むるを夢む。覺むるに及び氣病むこと一年。此に由りて之を言わば、思慮を盡せば精神を傷る也。⁽⁶⁰⁾

とまでいう、表現に傾けた努力が、朝廷での重用という形では報いられた後、揚雄は、司馬相如流の華麗な辭賦を捨てる。

さらに、問題点を絞る。

「文質彬彬」というごとく、「質實」と「外文」との兼ね合いは、思想においても、賤政が疲弊の極みにあった現實の政治に

においても、當時、重要な課題である。文辭においては、内容と修辭の關係である。

「文」の原義は「もよう」であり、さらには、人間の文化的営み全體をおおう。儒家にあっては、「禮樂法度」である。揚雄は『法言』にいう、⁽⁶¹⁾

聖人は質を文る者也。車服は以て之を彰かにし、藻色は以て之を明かにし、聲音は以て之を揚げ、詩書は以て之を光らす。籩豆陳ぜず、玉帛分たず、琴瑟鏗らず、鍾鼓攄たずんば、則ち吾以て聖人を見る無し矣。

「文」は内に秘められた「質」を外に顯す。「文」のありよう、則ち眞理のあらわれが、聖人の定めた禮樂法度であり、經典である。「文」は、過去の聖人に遭う事がかなわない後世の者が、聖人を知るよすがなのだ。

それが、現在の君子の行いに適用されれば、或るひと問う、君子 言えば則ち文を成し、動けば則ち徳を成す、何を以て也。曰く、其の中彌つるを以て外を彪る也。⁽⁶²⁾

君子の「質」は、言動では「文」、行動では「徳」として、外にあらわれる。

この意味で、揚雄は、修辭を否定しない。

或ひと問う、良玉彫らず、美言文らず、何の謂いぞ也。曰く、玉彫らざれば、璵璠器を作さず。言文らざれば、典謨經を作さず。⁽⁶³⁾

その盛られている内容が、玉の美であり、言の美であれば、その美を最大限に活かすべく、彫刻し、修辭を施すべきである。

ここでいう「美」は、引き合いに出されるのが、祭器と、典謨である上は、眞理のあらわれ、先の句の「文」を言い替えたものだ。

「文」と「質」とを、文辭に關していうのは、次の句である。

或ひと問う、君子辭を尙ばん乎。曰く、君子事をこれ尙と爲す。事、辭に勝てば、則ち、伉。辭、事に勝てば則ち賦。事辭稱は則ち經。言うに足り、容るるに足るは、徳の藻り也。⁽⁶⁴⁾

「辭」、言語表現には、「事」、内容が必要である。君子は、内容の伴った言語表現を第一に考える。言語表現が内容に比して、貧弱であれば、「伉」、無味乾燥なものになる。言語表現が、内容よりも、修辭に流れれば、それが「賦」である。内容と表現とが一致したものが、「經」、眞理を傳える、聖人の著作である。表現と内容とが過不足ない文章は、徳を飾るものである。

辭賦作家として出發した揚雄は、「辭勝事則賦、事辭稱則經」という認識に至る。辭賦の本質は、過度の修辭性にある。さればこそ、

或ひと問う、景差唐勒宋玉枚乘の賦也、益ある乎。曰く、必ず也、淫。淫なれば、則ち奈何。曰く、詩人の賦は、麗にして則、辭人の賦は、麗にして淫。如し孔子の門 賦を用うる也、則ち、賈誼は堂に升り、相如室に入る矣。其れ

用いざれば如何。⁽⁶⁵⁾

別な言い方もされる。

揚雄以爲く、靡麗の賦は、百を勧めて一を風す。猶お鄭衛の聲を騁せ、曲終わりて 雅を奏するがごとし。已だ戯れならず乎。

修辭偏重に陥った辭賦は、ただ一つの諷諫をなすために、多くの濫辭を費やす。孔子が、「淫」と退けた、鄭衛の刺激的な音楽を十二分に堪能したあげくに、正しい音楽である雅を言い譯のように演奏するようなものだ。ただのお遊びではないか。「詩人之賦」と「辭人之賦」とは、まさにこの關係にある。眞理に裏打ちされないうつくしさは、「淫」でしかない。

辭賦の美しさは、修辭にある。注意深くえらばれ、雕琢され、該博な知識を差し挟み、他の者がそれ以上の表現を加えられないまでに驅使されたレトリックは、讀む者の目を眩し、添えられた諷諫の語をそれと氣付かせずに終わる。「風」ではなく、「勸」、逆の結果を招く。かつての司馬相如の「大人賦」の轍を、司馬相如の後繼者を任じ、成帝に四賦を奉った揚雄も踏んだのである。現在の辭賦、すなわち、司馬相如流の辭賦では諷諫は不可能だ。表現だけが問題なのではない。辭賦をもって立つ者は、所詮支配者のおもちゃ、君子の則るべき道ではない。

『法言』には次の言葉がある。

吾 震風の能く聲聾を動かすを見ざる也、⁽⁶⁷⁾

聞く耳を持たなければ、震雷大風にすら驚くことはない。辭賦

によっても、揚雄の聲は届かなかつたのだ。

こうして「自序」を読むと、辭賦に關する議論は一貫しているように見える。しかし、揚雄が目指した「諷諫」とは、既に時代錯誤の行いだったのではないか。經に天子の行いを照らし、司馬相如にならって作られた四賦は、揚雄の文名を京師に轟かせたに違いない。『七略』が既に揚雄の四賦を收めるのは、反響の大きさをしのばせる。だからこそ、「解嘲」が生まれる素地ができたのではないか。華麗な作風に似合わぬ、貧相で口べたな田舎者の中年男。しかも、眞面目に辭賦が諷諫の役割を果たすと信じている野暮天。身體と文辭の乖離、的外れな田舎者のひたむきさを、洗練され、底意地の悪い京師の人々は笑わずにはいられない。その當時はもちろん、まして「投閣」の後はおさらだ。

「自序」に見える揚雄の辭賦論は、確かに現實の政治から、世界の法則（『太玄』）、人生の哲理（『法言』）に向かう、揚雄の同心を物語るものではある。しかし、同時に辭賦に傾けた情熱に對する辯明でもあったはずだ。「自序」の辭賦論と『法言』以下の著作との整合性は見事だ。それほどまでに肩肘を張る必要はないのだが、揚雄はそういう男なのである。

「投閣」ののち、死に瀕した揚雄はしばらく官を離れていたが、再び召されて大夫となつた。⁽⁶⁸⁾

元后傳は、王莽始建國五年に亡くなった元后のために揚雄が

書いた「元后誄」の一部を載せる。「投閣」をきっかけに、王莽は揚雄の文才を思いだしたようだ。しかし、本傳は王莽との關わりにはいっさい觸れない。

傳贊も、

莽 位を篡するに及んで、談説の士 符命を用い、功德を稱して封爵を獲る者 甚だ衆し、雄 復た侯せられず、耆老久次を以て轉じて大夫と爲る。勢利に恬たること乃ち是の如し、

と、揚雄が文辭を成した事には觸れず、かえって「自序」の「不汲汲於富貴」「時雄方草創太玄、有以自守泊如也」の言葉を補う。同じ頃「劇秦美新」は作られていたはずだ。

そして、もう一つ「自序」が觸れないのが、揚雄と蜀との關わりだ。揚雄は「蜀都賦」「蜀王本紀」の著者とされ、また「方言」を編纂したとも言われるが、「自序」にも『漢書』にもその名は見えない。京師で文人としての生涯を送った揚雄の辯明が「自序」だとするならば、中原ならざるものは、あるいは意識的に排されたのかも知れない。

さて、この頃、班氏は王莽の不興を買い、班婕妤が仕えた元后の取りなしで、閑職に就いている。⁽⁶⁹⁾ 平帝の時、王莽が自ら太平の治を致していると喧傳するために、風俗使者を全國に派遣し、天下の風俗をみ、功德を稱する頌聲を集めた際、⁽⁷⁰⁾ 班樺がなんの瑞祥も頌聲も報告しなかったからだ。班樺は班彪の父、班固の祖父である。このことがあるまで、王莽は班樺兄弟に自分

の兄弟のごとく接していた。同じ頃、天下から徴された小學者の見解を採って、揚雄は『訓纂篇』を著している⁽⁷¹⁾。

そして、班樨と揚雄は親密な交わりを結んでいる。

樨、彪を生む。彪字は叔皮、幼くして從兄嗣と共に游學す。家に賜書有り、内は財に足る。好古の士、遠方より至り、父の黨揚子雲以下門に造らざるは莫し⁽⁷²⁾。

ここにいう、「賜書」とは、班樨の兄旂が、才を愛され、特別に成帝から賜った祕書の藏書の副本である⁽⁷³⁾。河平三年に、成帝は劉向に祕書の典校を命じ、謁者陳農を天下の遺書を探す使者に命じた⁽⁷⁴⁾。劉向父子の校書の手傳いを命じられたのが、班旂である。當時、書物の流通は少なく、同じ頃、成帝の叔父にあたる東平王が、太史公諸子書を求めたが、許されなかった。それほどに、班氏の寵は厚かったのである。

おそらく、幼い彪は實際に揚雄を見知っていただろう。敘傳に據れば、班彪は平帝の元始三年の生まれとなる。哀帝期以降、⁽⁷⁵⁾『太玄』の執筆をこととして、政治の表舞臺ではさしたる活躍もない揚雄と、學問に篤く、王莽の世を避けている班樨。班固には、祖父と揚雄の姿が重なっていたのではないか。

傳贊は、人物を殆ど語らない「自序」をいくつかの逸話で補う。

家素より貧、酒を着む。人其の門に至るもの希れなり。時に好事の者の酒肴を戴せ従いて游學する有り、而うして鋸鹿侯芭、常に雄の居に従い、其の太玄・法言を受く焉、

劉歆も亦た嘗てこれを觀、雄に謂いて曰く、空しく自ら苦しむ。今の學者祿利あり。然るに尙お易を明かにする能わず。又太玄を何如せん。吾後人の用て醬瓿を覆うを恐るる也、雄笑いて應ぜず。年天鳳五年卒。侯芭爲に墳を起し、これを喪すること三年。

「自序」では、自らの文辭との格闘を餘儀なくされていた揚雄を、物靜かな賢人として方向づけたのは、班固の傳贊の描寫だ。そして、「自序」と傳贊とから醸成される揚雄像が、以後文學の中で定着するのだ。

注釋

- (1) 左思 詠史詩 其四 『文選』卷二一
- (2) 『漢書』は北京中華書局本、『文選』は鄧陽胡氏本を用いる。
- (3) 『漢書』で長い傳贊を持つのは、他に匈奴傳、西域傳である。
- (4) それぞれの序の『漢書』と『文選』の相違を示す。

● 羽獵賦序

其十二月羽獵、雄從、以爲昔在二帝三王、宮館臺沼池苑囿林麓藪澤賤足以奉郊廟、御賓客充庖厨而已、不奪百姓膏腴穀土桑拓之地、女有餘布、國有餘粟、國家殷富、上下交足故甘露零其庭、醴泉流其唐、鳳皇巢其樹、黃龍游其沼、麒麟臻其囿、神爵棲其林、昔者禹任虞而上下和、山木茂、成湯好田而天下用足、文王囿百里、民以爲尙小、齊宣王囿四十里、民以爲大、裕民之

與奪民也、武帝廣開上林、南至宜春鼎胡御宿昆吾、旁南山而西、至長楊五柞、北繞黃山、瀕渭而東、周褒數百里、穿昆明池象瀕河、營建章鳳闕神明駁姿、漸臺泰液象海水周流方丈瀛洲蓬萊、游觀侈靡、窮妙極麗、雖頗割其三垂以瞻齊民、然至羽獵田車戎馬器械儲、禁禦所營、尙泰奢麗誇詡、非堯舜成湯文王三驅之意也、又恐後世復修前好、不折中以泉臺、故聊因校獵賦以風、其辭曰、

其十二月、胡本作孝成帝時

少木茂、少、胡本作草

南至宜春鼎胡、南、胡本作東南、胡作湖

瀕渭而東、瀕、胡本作濱

然至羽獵田車、田、胡本作甲、李善注曰、甲、或爲田、非也、

又恐後世復修前好、修、胡本作脩

●甘泉賦序

孝成帝時、客有薦雄文似相如者、上方郊甘、泉泰時、汾陰后土、以求繼嗣、召雄待詔承明之庭、正月、從上甘泉、還奏甘泉賦以風、

胡本同

●長楊賦

明年、上將大誇胡人以多禽獸、秋、命右扶風發民入南山、西自褒斜、東至弘農、南畝漢中、張羅罔置罟、捕熊羆豪豬虎豹豺獫狁狐兔麋鹿、戴以檻車、輸長楊射熊館、以罔爲周陸、縱禽獸其中、令胡人手搏之、自取其獲、上親臨觀焉、是時農民不得收斂、雄從至射熊館、還、上長楊賦、聊因筆墨之成文章、故藉翰林爲

主人、子墨爲客卿以風、其辭曰、以罔爲周羽、罔、胡本作網

●解嘲序

哀帝時、丁傅董賢用事、附離之者、起家至二千石、時雄方草太玄、有以自守泊如也、或人有嘲雄以尙白、雄解之號曰解嘲、時雄方草太玄、草、胡本作草創或嘲雄以尙白、或、胡本作人有

(5) 『漢書』揚雄傳 傳贊

(6) 『後漢書』班固傳

既而有人上書顯宗、告固私改作國史者、有詔下郡、收固繫京兆獄、盡取其家書、……固弟超恐固爲郡所覈考、不能自明、乃馳詣闕上書、得召見、具言固所著述意、而郡亦上其書、顯宗甚奇之、召詣校書郎、除蘭臺令史、……遷爲郎、典校祕書、……帝乃復使終成前所著書、……固自永平中始受詔潛精積思二十餘年、至建初中乃成、當世甚重其書、學者莫不諷誦焉、

(7) さらに、『隋書』卷七五 儒林傳、劉炫傳には、

時に羣盜蜂起し、穀食踊貴し、經籍の道息み、教授行はれず。炫と妻子と相ひ去ること百里、聲問斷絶す。鬱鬱として志を得ず。乃ち自ら贊を爲りて曰く、

通人司馬相如、揚子雲、馬季長、鄭康成等、皆な自ら風徽を敘し、芳を來葉に傳ふ、……

と、揚雄を、司馬相如、馬融、鄭玄とともに、「自敘」の作家として擧げる。

降って、唐の劉知幾は、「自敘」を歴史記述の文體の一つに

挙げ、「揚雄自序」に言及し、

蓋作者自敘、其流出於中古乎、案屈原離騷經、其首章上陳氏族、下列祖考、先述厥生、次顯名字、自敘發述、實基於此、降及司馬相如、始以自敘爲傳、然其所敘者、但記自少及長、立身行事而已、逮於祖先所出、則蔑爾無聞、至馬遷、又徵三閭之故事、放文園之近作、模楷二家、勒成一卷、於是揚雄遵其舊轍、班固酌其餘波、自敘之篇、實煩於代、雖屬辭有異、而茲體無易、(『史通』卷九 序傳 第三十二)

屈原の「離騷」をその鼻祖とし、「司馬相如自敘」がそれに繼ぎ、「太史公自序」は、前二者を折衷し、總合して「自敘」の體例を確立した、と見る。「揚雄自敘」「漢書敘傳」は、それを襲ったもので、以後、「自敘」の體例は變わらないとする。

また、『藝文類聚』には、「漢揚雄自敘曰」として、雄爲人簡易佚宕、默而好深湛之思、清靜無爲、少嗜欲、不汲汲於富貴、不戚戚於貧賤、不修廉隅、以傲名當世、無但石之儲、晏如也、自有大度、非聖哲之所不好也、非其意、雖富貴不事也、(『藝文類聚』卷二六 人部 言志)

という、現『漢書』本傳に見える文を引く。

これらの例は、いずれも、六朝から、唐代にかけ、「揚雄自序」と呼ばれるものが存在した事を示す。

(8) 『後漢書』王充傳

後到京師、受業太學、師事扶風班彪、

(9) 揚雄の作品については、別表一参照

(10) 「自序」は揚雄の「序」のみを集めたものと考え餘地も残されている。もし「自序」が『太玄』『法言』を含むものだ

とすると、かなり大部のものになる。

(11) 劉知幾は、『史通』雜說上の「司馬相如自敘」に關する議論で、

馬卿自序を爲り、具さに其の集中に在り。子長因りて斯の篇を録し、即ち列傳と爲す。班氏舊に仍り、曾て改奪する無し。尋ぬるに固馬揚傳末に於いて、皆な遷雄の自敘 此くの如しと云ふ。

と、班固の引用態度をいい、「太史公自序」「揚雄自序」をそのまま、列傳に收めたと解釋している。『史記』太史公自序と、『漢書』司馬遷傳と比較すると、『漢書』が、「報仁少卿書」を傳贊の中に加え、そのために、重複する「發憤著書之說」を削り、また、『史記』篇目の贊語を除いているほかに、改變はみられない。

(12) また、餘り注意されていないが、王莽には「自本」があった。師古注は

述其本系

とする。王莽自ら王氏の系譜を黃帝に溯って述べたもので、一部が「元后傳」に引かれている。黃帝を王氏の祖とするのは、經に明文はない。符命による易姓革命で、政權を得た王莽には、古代秩序に乗って自らの系譜を言明する必要があったのだ。それが經に照らして眞實であるか否かは置き、中國においては、書かれたところに歴史が始まる。

▽漢書 元后傳

莽 自ら黃帝の後と謂ふ。其の自本に曰く、黃帝 姓 姚氏、八世にして虞舜生まる、舜嬀汭に起り、嬀を以て姓と爲す。

周武王に至り、舜の後嫡満を陳に封ず、是れ胡公爲り。十三世にして、完生まる、……齊に葬る、齊桓公 以て卿と爲す。田氏を姓とす。十一世にして、田和 齊國に有り、二世王を稱す。王建に至りて秦の滅ぼす所と爲る。項羽、起ち、建の孫安を封じて濟北王と爲す。漢興るに至り、安 國を失ひ、齊人これを王家と謂ひ、因りて以て氏と爲す。

(13) ▼漢書 王莽傳中 始建國二年(庚午一〇) 條

是の時 争いて符命を爲り侯に封ぜらる。其の爲さざる者は相い戯むれて曰く、獨り天帝の除書のみ無き乎、と。司命陳崇等莽に白して曰く、「此れ姦臣福を作すの路を開き天命を亂ず。宜しく其の原を絶つべし」と。莽も亦たこれを厭い、遂に尙書大夫趙竝をして驗治せ使め、五威將率の班^{ハツ}つ所に非ざれば、皆獄に下す。

(14) ▼漢書 王莽傳中 始建國三年(辛未一一) 條

初め、甄豐劉歆王舜莽の腹心爲り、位に在るを倡導し、功德を褒揚す。……而うして疏遠にして進むを欲する者、竝な符命を作る。莽 遂に據りて以て眞に即く。舜 内に懼るる而已。豐素と剛強、莽 其の説ばざるを覺る。……時に(甄豐) 子尋……即ち符命を作る。言うところは、新室 當に陝を分け、二伯を立て、豐を以て右伯と爲し、太傅平晏を左伯と爲し、周召の故事の如くすべし、と。莽 即ちこれに従い、豐を拜して右伯と爲す。職を述べ西に出ずるに當たり、未だ行かずして、尋復た符命を作る。言うところは故漢氏平帝后黃皇室主尋の妻と爲せ、と。莽詐を以て立てば、心に大臣の怨謗するを疑い、威を震い以て下を懼れさせんと欲す。是に因りて怒を發して曰く、

黃皇室主は天下の母なり。此れ何の謂いぞ也、と。尋を收捕す。尋亡ぐ。豐 自殺す。尋 方士に隨いて華山に入る。歲餘 捕得せらる。辭は國師公歆子……棗、棗弟……泳、大司空(王) 邑弟奇、及 門人……丁隆等に連なり、公卿黨親列公以下牽引せられ、死する者數百人、

(15) ◇『漢書』揚雄傳下 傳贊 三五八四頁

(16) 『漢書』藝文志 小學家

(17) 應劭『風俗通義』序

(18) 『漢書』卷八十五 谷永傳

(19) 『漢書』卷八十五 杜鄴傳

(20) 『論衡』齊世篇

(21) 解嘲序

(22) 『漢書』揚雄傳 本傳ならびに傳贊

(23) 師古注、顧、反也、

(24) 高明 尙書洪範 無虐氣獨而畏高明

李奇曰、鬼神害盈而福謙也、

攬挈帝、師古注、攬挈帝、妄有搏執牽引也、

位極者宗危、宗、李善注本作高、胡克家文選考異曰、何校改宗、

袁本云、善作高、茶陵本云、五臣作宗、案、漢書作宗、宗字是也、高字傳寫誤、

寂莫、九辯其一 蟬寂漠而無聲

李奇曰、或能勝之

蝦蟇 師古注、蝦蟇、蜥蜴也、李善注、說文曰、在壁曰蝦蟇、

在草蜥蜴、

(25) ◇『漢書』揚雄傳下 傳贊

(26) 『論語』 子罕篇

(27) 『論語』 堯曰篇

(28) 『史記』 司馬相如傳

(29) 『晉書』 文苑傳 左思傳

(30) 『論語』 雍也篇

(31) 『藝文類聚』 卷五六 雜文部 賦所引

(32) 『史記』 屈原賈生列傳

(33) 『論語』 雍也篇

(34) 「龍蛇」は、『周易』繫辭傳下の「龍蛇之蟄、以存身也」を踏まえる。また、『莊子』外篇山木篇の「一龍一蛇、與時俱化、無肯專爲」をも、意識するだろう。

(35) 『淮南子』原道訓

(36) 乃作書、往往 離騷文而反之、自岷山投諸江流以弔屈原、名曰反離騷、又旁離騷作重一篇、名曰廣騷、又旁惜誦以下至懷沙一卷、名曰畔牢騷

(37) 王念孫『讀書雜誌』四之十三の説に據り、「慶」を「光」と同様に讀む。また、

龍舉而景雲屬 『淮南子』 天文訓

なお、『藝文類聚』卷二六所引の曹植「言志詩」は、

慶雲未時興、雲龍潛作魚、

と、「慶雲」に讀む

(38) 『太玄』中

陽氣潛萌於黃宮、信無不在乎中

初一 昆侖旁薄、幽、

太玄文 昆侖旁薄、大容也、

昆侖旁薄、資懷無方

(39) 『文心雕龍』哀弔篇

(40) 「反離騷」の他に、『楚辭』の擬作があったことが伝えられる。注36参照。ここにみえる、「離騷」「惜誦」「懷沙」は、いずれも、王逸が屈原の作とするものである。「惜誦」「懷沙」は、現『楚辭章句』では、「九章」に屬し、その間に、「涉江」「哀郢」「抽思」を挟む。「惜誦」以外は、本文の末に、亂辭が附加する。「甘泉賦」も、末尾に亂辭を伴う。

『章句』の原型は、劉向の編集になると言われる。劉向の校書は陽朔の前の年號、河平三年に始まっている。これら、揚雄の擬作の制作年代はあきらかでないが、若年の作のごとくである。揚雄がよった本は、「九章」の編次についていえば、現『章句』に近いものであったかも知れない。揚雄にも、劉向編の『楚辭』に註釋があったといわれる。

(41) (元帝)嘗侍燕從容言、陛下持刑太深、宜用儒生、宣帝作色曰、漢家自有制度、本以霸王道雜之、奈何純任德教、用周政乎、好是古非今、使人眩於名實、不知所守、何足委任、乃歎曰、亂我家者、太子也、

『漢書』卷九 元帝紀

(42) 揚雄の名の残るものとしては、

『漢書』五行志中之下

哀帝建平二年四月乙亥朔、御史大夫朱博爲丞相、少府趙玄爲御史大夫、臨延登受策、有大聲如鍾鳴、殿中郎吏陞者皆聞焉、上以問黃門侍郎揚雄李尋、尋對曰、洪範所謂鼓妖也、師法以爲人君不聽、爲衆所惑、空名得進、則有聲無形、不知所從生、其傳

曰、歲月日之中、則正卿受之、今以四月日加辰巳有異、是爲中焉、正卿謂執政大臣也、宜退丞相御史、以應天變、然雖不退、不出期年、其人自蒙其咎、揚雄亦以爲鼓妖、聽失之象也、朱博爲人彊毅多權謀、宜將不宜相、恐有凶惡亟失之怒、八月、博玄坐爲姦謀、博自殺、玄滅死論、京房易傳曰、令不修本、下不安、金母故自動、若有音、

(43) 『漢書』卷八十五 谷永傳

永於經書、汎爲疏達、與杜欽杜鄴略等、不能治浹如劉向父子及揚雄也、其於天官、京氏易最密、故善言災異、前後所上四十餘事、略相反覆、專攻上身與後宮而已、黨於王氏、上亦知之、不甚親信也、

谷永と揚雄の字はともに「子雲」であり、後世、両者の逸話が混同された可能性は大きい。

(44) 菑異、董相夏侯勝京房。

『法言』淵騫篇

(45) 『漢書』郊祠志下

(46) 詳しくは附屬の年表を参照

(47) 甘泉泰畤汾陰后土は、最終的には、王莽の進言により、儒學的な見地から、廢止される。『漢書』郊祠志の後半は、ほぼ、甘泉泰畤汾陰后土と、長安南北郊の興廢の記録である。

(48) 班固「兩都賦序」、

賦、古詩之流也、……孝成之世、論而錄之、蓋奏御者千餘篇、

(49) 『文選』には見えない。

(50) 『漢書』外戚傳 孝成趙皇后傳

(51) 太玄 銳

陽氣岑以銳、物生也、咸專一而不一、

次四 銳于時、無不利

(52) 太玄 更

陽氣既飛、變勢易形、物改其靈

上九 不終其德、三歲見代、

(53) 最初に述べたように、「甘泉賦」以下の揚雄の四賦は、作られた順には竝んでいない。李善が、『漢書』と『七略』を勘案して、既に指摘するところだ。

★羽獵賦、李善注

七略曰、羽獵、永始三年十二月上、

★甘泉賦、李善注

漢書曰、永始四年正月、行幸甘泉、七略曰、甘泉賦、永始三年正月待詔臣雄上、漢書三年無行甘泉之文、疑七略誤也、

★長楊賦 李善注

明年、謂作羽獵賦之明年、即校獵之年也、班固作賦之明年、漢書成紀曰、元延二年冬、幸長楊宮、縱胡客大校獵、是也、七略曰、羽獵賦永始三年、去校獵之前首尾四載、謂之明年、疑班固誤也、又、七略曰、長楊賦、綏和在校獵後四載、無容元延二(按、當作元)年校獵、綏和二年賦、又疑七略誤、

(54) 太玄 閑

陽氣閑於陰、然物咸見閑、

(55) ◆『漢書』成帝紀 元延二年(庚戌一一)條
冬、行幸長楊宮、從胡客大校獵、宿萑宮、賜從官、

(56) 『義門讀書記』卷四五

(57) 太玄 飾

陰白陽黑、分行其職、出入有節、

次七、不丁言時、微于辭、見上疑、測曰、不丁言時、何可章也、

(58) 『法言』 吾子篇

(59) 『法言義疏』 四六頁

(60) 『意林』 卷三所引 『桓譚新論』

(61) 『法言』 先知篇

(62) 『法言』 君子篇

(63) 『法言』 寡見篇

(64) 『法言』 吾子篇

(65) 『法言』 吾子篇

(66) 『漢書』 卷五七下 司馬相如傳 傳贊

(67) 『法言』 問明篇

(68) 『漢書』 揚雄傳 傳贊

(69) 『漢書』 敘傳

王莽少與穉兄弟同列友善、兄事莽而弟畜穉、莽之卒也、修總麻、賻贈甚厚、平帝即位、太后臨朝、莽秉政、方欲文致太平、使使者分行風俗、采頌聲、而穉無所上、琅邪太守公孫闓言災害於公府、大司空甄豐遣屬馳至兩郡諷吏民、而劾闓空造不祥、穉絕嘉應、嫉害聖政、皆不道、太后曰、不宜德美、宜與言災害者異罰、且後宮賢家、我所哀也、闓下獄誅、穉懼、上書陳恩謝罪、願歸相印、入補延陵郎、太后許焉、食故祿終身、由是班氏不顯莽朝、亦不罹咎、

(70) 風俗使者については、『漢書』平帝紀 王莽傳上。

(71) 『漢書』藝文志 小學類

(72) ◎『漢書』序傳上

疏、官本南監本作揚子雲、補注作楊子雲

(73) ◎『漢書』敘傳上

莽博學有俊材、左將軍師丹學賢良方正、以對策爲議郎、遷諫大夫右曹中郎將、與劉向校祕書、每奏事、莽以選受詔進讀羣書、上器其能、賜以祕書之副、時書不布、自東平思王以叔父求太史公諸子書、大將軍白不許、語在東平王傳、莽亦早卒、有子曰嗣、顯名當世、

(74) ◆漢書 成帝紀 河平三年條

光祿大夫劉向校中祕書、謁者陳農使、使求遺書於天下

▽漢書 劉歆傳

歆字子駿、少以通詩書能屬文召、見成帝、侍詔宦者署、爲黃門郎、河平中、受詔與父向領校祕書、講六藝傳記、諸子詩賦數術方技、無所不究、向死後、歆爲中學校尉

(75) ◎『漢書』敘傳上

叔皮唯聖人之道然後盡心焉、年二十、遭王莽敗、世祖即位於冀州、……乃著王命論以救時難、其辭曰、……すなわち地皇四年のことである。

揚雄年譜 附班氏及王充

前漢 宣帝 劉詢

甘露元年戊辰（西曆前53）揚雄一歲

揚雄生まれる

@任昇 王文憲集序 文選卷四六

其先自秦至宋國史、家諜詳焉、

善曰、七略曰、子雲家諜言以甘露元年生也、

前漢 成帝 劉鷺

成帝即位、王鳳大司馬大將軍となる

◆『漢書』成帝紀

竟寧元年五月、元帝崩、六月己未、太子卽皇帝位、以元舅……

王鳳爲大司馬大將軍、

建始元年己丑（前32）揚雄二二歲

建始二年庚寅（前31）揚雄二三歲

建始三年辛卯（前30）揚雄二四歲

建始四年壬辰（前29）揚雄二五歲

班固の祖の逸話。曾祖父況の娘、成帝の寵愛を受け、班氏榮える。

◎『漢書』敘傳上

壹生孺、孺爲任俠、州郡歌之、孺生長、官至上谷守、長生同、

以茂材爲長子令、同生況、舉孝廉爲郎、積功勞、至上河農都尉、

大司農奏課連最、入爲左曹越騎校尉、成帝之初、女爲健仔、致

仕就第、貲累千金、徒昌陵、昌陵後罷、大臣名家皆占數 長安、

班固の祖父兄弟の逸話。好學の伯、王鳳の推舉を受ける

況生三子、伯、旂、穉、伯少受詩於師丹、大將軍王鳳薦伯宜勸

學、召見宴昵殿、容貌甚麗、誦說有法、拜爲中常侍、時上方鄉

學、鄭寬中張禹朝夕入說尚書論語於金華殿中、詔伯受焉、旣通

大義、又講異同於許商、遷奉車都尉、數年、金華之業絕、出與王許子弟爲羣、在於綺襦紈綺之間、非其好也、

河平元年癸巳（前28）揚雄二六歲

河平二年甲午（前27）揚雄二七歲

河平三年乙未（前26）揚雄二八歲

劉向・歆父子、祕書の校書を命じられる

◆『漢書』成帝紀

光祿大夫劉向校中祕書、謁者陳農使、使求遺書於天下

▽『漢書』劉歆傳

歆字子駿、少以通詩書能屬文召、見成帝、侍詔宦者署、爲黃門

郎、河平中、受詔與父向領校祕書、講六藝傳記、諸子詩賦數術

方技、無所不究、向死後、歆爲中壘校尉

班固の大伯父、劉向の校書に參畫、祕書の副本を賜る

◎『漢書』敘傳

旂博學有俊材、左將軍師丹學賢良方正、以對策爲議郎、遷諫大

夫右曹中郎將、與劉向校祕書、每奏事、旂以選受詔進讀羣書、

上器其能、賜以祕書之副、時書不布、自東平思王以叔父求太史

公諸子書、大將軍白不許、語在東平王傳、旂子亦早卒、有子曰

嗣、顯名當世、

師古曰、此言東平王求書不得、而旂獲賜祕書、明見寵異、

河平四年丙申（前25）揚雄二九歲

◆『漢書』成帝紀

秋九月壬申、東平王宇薨、

陽朔元年丁酉（前24）揚雄三〇歲

陽朔二年戊戌（前23）揚雄三一歲

陽朔三年己亥（前22）揚雄三二歲

王鳳卒す。王音、大司馬大將軍となる

△『漢書』百官公卿表八三〇頁

八月丁巳、大司馬鳳薨、九月甲子、御史大夫王音爲大司馬車騎將軍、

陽朔四年庚子（前21）揚雄三三歲

陽朔中

★揚雄「反離騷」

鴻嘉元年辛丑（前20）揚雄三四歲

成帝微行をはじめ。のち趙飛燕姉妹を後宮に入れる

◆『漢書』成帝本紀 三一六頁

上始爲微行出、

◆『漢書』成帝本紀 三一六頁

冬、黃龍見眞定、

鴻嘉二年壬寅（前19）揚雄三五歲

◆『漢書』成帝本紀 三一六頁

春、行幸雲陽、

雉の怪異。王音、成帝をいさめる

▲『漢書』五行志中之下 一四一七—一四一八頁

三月、博士行大射禮、有飛雉集庭、歷階登堂而雄、後雉又大集太常宗正丞相御史大夫大司馬車騎將軍之府、又集未央宮承明殿屋上、

時大司馬車騎將軍王音侍詔寵等上言、天地之氣、以類相應、譴告人君、甚微而著、雉者聽祭、先聞雷聲、故月令以紀氣、經戴高宗、雉之異、以明轉禍爲福之驗、今雉以博士行禮之日大眾聚會、飛集於庭、歷階登堂萬衆睚眦、驚怪連日、經歷三公之府、太常宗正典宗廟骨肉之官、然後入宮、其宿留告曉人、具備深切、雖人道相戒、何以過是、

後帝使中常侍鼂閔、詔音曰、聞捕得雉、毛羽頗摧折、類拘執者、得無人爲之、音復對曰、陛下安得亡國之語、不知誰主爲佞諂之計、誣亂聖德如此者、左右阿諛甚衆、不待臣音復詔而足、公卿以下、保位自守、莫有正言如令陛下覺寤、懼大禍且至身、深責臣下、繩以聖法、臣音當先受誅、豈有以自解哉、今卽位十五年、繼嗣不立、日日駕車而出、決行流聞、海內傳之、甚於京師、外有微行之害、內有疾病之憂、皇天數見災異、欲人變更、終已不改、天尚不能感動陛下、臣子何望、獨有極言待死、命在朝暮而已、如有不然、老母安得處所、尙何皇太后之有、高祖天下當以誰屬乎、宜謀於賢知、克己復禮、以求天意、繼嗣可立、災變尙可銷也、

鴻嘉三年癸卯（前18）揚雄三六歲

趙飛燕姉妹、後宮の寵愛を獨占、皇后廢され、班婕妤自ら身を退く

◆『漢書』成帝紀

冬十一月甲寅、皇后許氏廢、

◎『漢書』敘傳

會許后廢、班婕妤供養東宮、進侍者李平爲婕妤、而趙飛燕爲皇后、伯遂稱篤、久之、上出過臨侯伯、伯惶恐、起臥事、

鴻嘉四年甲辰（前17）揚雄三七歲

鴻嘉永始之間

成帝の微行癖激しくなり、王音、劉向らいさめる

▲『漢書』五行志中之上 一三六八頁

成帝鴻嘉永始之間、好爲微行而出游、選從期門郎有材力者、及私奴客、多至十餘、少五六人、皆白衣袒幘、帶持刀劍、或乘小車、御者在茵上、有皆騎、出入市里郊野、遠至旁縣、時、大臣車騎將軍王音及劉向等以切諫、

谷永曰、易稱得臣無家、言王者臣天下、無私家也、今陛下棄萬乘之至貴、樂家人之賤事、厭高美之尊稱、好匹夫之卑字、崇聚票輕無宜之人、以爲私客、置私田於民間、畜私奴車馬於北宮、數去南面之尊、離深宮之固、挺身獨與小人晨夜相隨、烏集醉飽吏民之家、亂服共坐、溷有亡別、閔遜樂、晝夜在路、典門戶奉宿衛之臣執干戈守空宮、公卿百寮不知陛下所在、積數年矣、昔號公爲無道、有神降曰賜爾土田、言將以庶人受土田也、諸侯夢得土田、爲失國、而況王者畜私田賤物、爲庶人之事乎、

永始元年乙巳（前16）揚雄三八歲

趙飛燕、皇后となり、班伯一時朝廷より身を退き、病に倒れ卒す

◆『漢書』成帝紀

夏六月丙寅、立皇后趙氏、

◎『漢書』敘傳

而趙飛燕爲皇后、伯遂稱篤、久之、上出過臨侯伯、伯惶恐、起臥事、

自大將軍薨後、富平定陵侯張放淳于長等始愛幸、出爲微行、行則同輿執轡、……後上朝東宮、太后泣曰、帝閒顔色瘦黑、班侍中本大將軍所舉、宜寵異之、益求其比、以輔聖德、宜遣富平侯且就國、上曰、諾、車騎將軍王音聞之、以風丞相御史、奏富平侯罪過、上乃出放爲邊都尉、後復徵入、太后與上書曰、前所道尙未效、富平侯反復來、其能默虜、上謝曰、請今奉詔、是時許商爲少府、師丹爲光祿勳、上於是引商丹入爲光祿大夫、伯遷水衡都尉、與兩師竝侍中、皆秩中二千石、每朝東宮、常從、及有大政、俱使諡指於公卿、上亦稍厭游宴、復修經書之業、太后甚悅、丞相方進復奏、富平侯竟就國、會伯病卒、年三十八、朝廷愍惜焉、

永始二年丙午（前15）揚雄三九歲

王音卒す

◆『漢書』成帝本紀 三二一頁

春正月己丑、大司馬車騎將軍王音薨、

■『漢書』卷九十八 元后傳

王氏爵位日盛、唯音爲修整、數諫正、有忠節、輔政八年、薨、

弔如大將軍、諡曰敬侯、子舜嗣侯、爲大僕侍中、特進成都侯商代音爲大司馬衛將軍、

永始三年丁未（前14）揚雄四〇歲

甘泉泰時・汾陰后土・雍五時などの祭りを復活

◆『漢書』成帝本紀 三二三頁

冬十月庚辰、皇太后詔有司復甘泉泰時汾陰后土雍五時陳倉陳寶祠、語在郊祠志、

永始四年戊申（前13）揚雄四一歲

甘泉泰時・汾陰后土を行ふ

◆『漢書』成帝本紀

春正月、行幸甘泉、郊泰時、神光降集紫殿、大赦天下、三月、行幸河東、祠后土、

★揚雄「甘泉賦」「河東賦」

元延元年己酉（前12）揚雄四二歲

元延二年庚戌（前11）揚雄四三歲

甘泉泰時・汾陰后土を行ふ

◆『漢書』成帝紀

春正月、行幸甘泉、郊泰時、

三月、行幸河東、祠后土、

冬、行幸長楊宮、從胡客大校獵、宿 萑宮、賜從官、

如淳曰、合軍聚衆、有幡校擊鼓也、周禮校人掌王田獵之馬、故謂之校獵、

師古曰、如說非也、此校謂以木自相貫穿爲闌校耳、校人職云、六廐成校、是則以遮闌爲義也、校獵者、大爲闌校以遮禽獸而獵取也、軍之幡旗雖有校名、本因部校、此無預也、

師古曰、萑音倍、

★揚雄「長楊賦」

元延三年辛亥（前10）揚雄四四歲

元延四年壬子（前9）揚雄四五歲

綏和元年癸丑（前8）揚雄四六歲

綏和二年甲寅（前7）揚雄四七歲

▽『漢書』劉向傳

劉向卒

成帝期

★『漢書』趙充國傳

揚雄「趙充國頌」

★『漢書』遊俠傳 陳遵傳

揚雄「酒箴」

前漢 哀帝 劉欣

王莽、劉歆を哀帝に推舉、劉歆『七略別錄』完成す

▽『漢書』劉傳

哀帝初即位、大司馬王莽舉、宗室有材行、爲侍中太中大夫、遷

騎都尉、奉車光祿大夫、貴幸、復領五經、卒父前業、乃集六藝羣書、種別爲七略、語在藝文志、

班固の祖父穉、地方官となる。

◎『漢書』敘傳

穉少爲黃門郎中常侍、方直自守、成帝季年、立定陶王爲太子、數遣中盾請問近臣、穉獨不敢答、哀帝卽位、出穉爲西河屬國都尉、遷廣平相、

建平元年乙卯（前6）揚雄四八歲

建平二年丙辰（前5）揚雄四九歲

太初元將元年丙辰（前5）揚雄四九歲

哀帝、再受命を試みる

◆『漢書』哀帝紀

六月、待詔夏賀良等言赤精子之讖、漢家曆運中衰、當再受命、宜改元易號、（哀帝從之）

八月、詔曰、……朕過聽賀良等言、冀爲海內獲福、卒亡嘉應、皆違經背古、不合時宜、……賀良等反道惑衆、下有司、皆伏辜、

建平三年丁巳（前4）揚雄五〇歲

建平四年戊午（前3）揚雄五一歲

★『漢書』匈奴傳下

揚雄「上書諫毋許朝單于」、

元壽元年己未（前2）揚雄五二歲

元壽二年庚申（前1）揚雄五三歲

前漢 平帝 劉衍

▽『漢書』劉歆傳

……會哀帝崩、王莽持政、莽少與歆俱爲黃門郎、重之、白太后、太后留歆爲右曹太中大夫、遷中壘校尉、義和、京兆尹、使治明堂辟雍、封紅林侯、典儒林史卜之官、考定律曆、著三統曆譜、

元始元年辛酉（西曆1）揚雄五四歲

元始二年壬戌（西曆2）揚雄五五歲

元始三年癸亥（西曆3）揚雄五六歲

王莽の娘、平帝の皇后となる

◆『漢書』平帝紀

春、詔有司爲皇帝納采安漢公莽女、語在莽傳、又詔光祿大夫劉等雜定婚禮、

夏、安漢公奏車服制度、吏民養生、送終嫁娶奴婢田宅器械之品、立官稷及學官、

◎班彪生

元始四年甲子（西曆4）揚雄五七歲

王莽、明堂建設、風俗使者を派遣

◆『漢書』平帝紀

遣太僕王憚等八人置副、假節分行天下、觀覽風俗、

夏、安漢公奏立明堂辟雍、

元始五年乙丑（西曆5）揚雄五八歲

班禪、瑞祥を報告せず、王莽との關係を離れる

◆『漢書』平帝紀

羲和劉 等四人使治明堂辟雍、令漢與文王靈臺周公作洛同符、太僕王憚等八人使行風俗、宣明德化、萬國齊同、皆封爲列公、徵天下通知逸經古記天文歷算鍾律小學史篇方術本草及以五經論語孝經爾雅數授者、在所爲駕一封軺傳、遣詣京師、至者數千人、

▼『漢書』王莽傳上

風俗使者八人還、言天下風俗齊同、詐作郡國造歌謠、頌功德、凡三萬言、莽奏定著令、又奏爲市無二賈、官無獄訟、邑無盜賊、野無飢民、道不拾遺、男女異路之制、犯者象刑、劉歆陳崇等十人皆以治明堂、宣教化、封爲列公、

◎『漢書』敘傳

王莽少與禪兄弟同列友善、兄事莽而弟畜禪、莽之卒也、修總麻、賻贈甚厚、平帝即位、太后臨朝、莽秉政、方欲文致太平、使使者分行風俗、采頌聲、而禪無所上、琅邪太守公孫闐言災害於公府、大司空甄豐遣屬馳至兩郡諷吏民、而劾闐空造不祥、禪絕嘉應、嫉害聖政、皆不道、太后曰、不宜德美、宜與言災害者異罰、且後宮賢家、我所哀也、闐下獄誅、禪懼、上書陳恩謝罪、願歸相印、入補延陵郎、太后許焉、食故祿終身、由是班氏不顯莽朝、亦不罹咎、

師古曰、事旂如兄、遇禪如弟。

師古曰、班健仔有賢德、故哀閔其家、

元始中

☆『漢書』藝文志

至元始中、徵天下通小學者以百數、各令記字於庭中、揚雄取有用者以作訓纂篇、順續蒼頡、又易蒼頡中重複之字、凡八十九章、

前漢 孺子 劉嬰

居攝元年丙寅（西曆6）揚雄五九歲

居攝二年丁卯（西曆7）揚雄六〇歲

居攝三年戊辰（西曆8）揚雄六一歲

王莽、符命を迎える

▼『漢書』王莽傳上

是歲廣饒侯劉京車騎將軍千人扈雲大保屬賊鴻奏符命、京言齊郡新井、雲言巴郡石牛、鴻言扶風雍石、莽皆迎受、

初始元年戊辰（西曆8）揚雄六一歲

王莽、符命によって、新を建國

▼『漢書』王莽傳上

梓潼人哀章學問長安、素無行、好爲大言、見莽居攝、卽作銅匱、爲兩檢、署其一曰、天帝行璽金匱圖、其一署曰、赤帝行璽某傳、豫黃帝金策書、某者、高皇帝名也、書言王莽爲眞天子、皇太后如天命、……戊辰、莽至高廟拜受金匱神璽、……下書曰、……皇天上帝……天神明詔告、屬予以天下兆民、赤帝漢氏高皇帝之

靈、承天命、傳國金策之書、予甚祗畏、敢不欽受、以戊辰直定、御王冠、即真天子位、定有天下之號曰新、

師古注、嬪、古禪字、言有神明、使漢禪位於莽也、
師古注、屬、委付也、

新 王莽

始建國元年己巳（西曆9）揚雄六二歲

始建國二年庚午（西曆10）揚雄六三歲

王莽符命を禁じる

▼『漢書』王莽傳中

是時爭爲符命封侯、其不爲者相戲曰、獨無天帝除書乎、司命陳崇等白莽曰、此開姦臣作福之路而亂天命、宜絕其原、莽亦厭之、遂使尙書大夫趙竝驗治、非五威將率所班、皆下獄、

始建國三年辛未（西曆11）揚雄六四歲

揚雄 劉棻の疑獄に連座、天祿閣より投身

▼『漢書』王莽傳中

初、甄豐劉歆王舜爲莽腹心、倡導在位、褒揚功德、……而疏遠欲進者、竝作符命、莽遂據以即真、舜 內懼而已、豐素剛強、莽覺其不說、……時（甄豐）子尋……即作符命、言新室當分陝、立二伯、以豐爲右伯、太傅平晏爲左伯、如周召故事、莽即從之、拜豐爲右伯、當述職西出、未行、尋復作符命、言故漢氏平帝后黃皇室主爲尋之妻、莽以詐立、心疑大臣怨謗、欲震威以懼下、因是發怒曰、黃皇室主天下母、此何謂也、收捕尋、尋亡、豐自殺、尋隨方士入華山、歲餘捕得、辭連國師公歆子……棻、棻弟

……泳、大司空（王）邑弟奇、及歆門人……丁隆等、牽引公卿黨親公列以下、死者數百人、

◇『漢書』揚雄傳下 傳贊

王莽時、劉歆甄豐皆爲上公、莽既符命自立、即位之後欲絕其原以神前事、而豐子尋歆子棻復獻之、莽誅豐父子、投棻四裔、辭所連及、便收不請、時雄校書天祿閣上、治獄使者來、欲收雄、雄恐不能自免、乃從閣上自投下、幾死、莽聞之曰、雄素不與事、何故在此、問請問其故、乃劉棻嘗從雄學作奇字、雄不知情、有詔勿問、然京師爲之語曰、惟寂莫、自投閣、爰清靜、作符命、

始建國四年壬申（西曆12）揚雄六五歲

始建國五年癸酉（西曆13）揚雄六六歲

★『漢書』元后傳

「元后誅」

天鳳元年甲戌（西曆14）揚雄六七歲

天鳳二年乙亥（西曆15）揚雄六八歲

天鳳三年丙子（西曆16）揚雄六九歲

天鳳四年丁丑（西曆17）揚雄七〇歲

天鳳五年戊寅（西曆18）揚雄七一歲

揚雄卒す

★この年までに

揚雄「劇秦美新」

◇『漢書』揚雄傳 傳贊

(揚雄) 年七一、卒。

天鳳六年己卯 (西曆19)

地皇元年庚辰 (西曆20)

地皇二年辛巳 (西曆21)

地皇三年壬午 (西曆22)

地皇四年癸未 (西曆23)

新滅ぶ、班彪二十歳

◎『漢書』序傳上

叔皮唯聖人之道然後盡心焉、年二十、遭王莽敗、世祖即位於冀州、……乃著王命論以救時難、其辭曰、……

後漢 光武帝 劉秀

建武元年乙酉 (西曆25)

建武二年丙戌 (西曆26)

建武三年丁亥 (西曆27)

王充生まれる

※『論衡』自紀篇

王充生

建武四年戊子 (西曆28)

建武五年己丑 (西曆29)

建武六年庚寅 (西曆30)

建武七年辛卯 (西曆31)

建武八年壬辰 (西曆32)

◎班固生

建武九年癸巳 (西曆33)

建武十年甲午 (西曆34)

建武十一年乙未 (西曆35)

建武十二年丙申 (西曆36)

建武十三年丁酉 (西曆37)

建武十四年戊戌 (西曆38)

建武十五年己亥 (西曆39)

建武十六年庚子 (西曆40)

建武十七年辛丑 (西曆41)

建武十八年壬寅 (西曆42)

建武十九年癸卯 (西曆43)

建武二〇年甲辰 (西曆44)

建武二一年乙巳 (西曆45)

建武二二年丙午 (西曆46)

建武二三年丁未 (西曆47)

建武二四年戊申 (西曆48)

建武二五年己酉 (西曆49)

建武二六年庚戌 (西曆50)

建武二七年辛亥 (西曆51)

建武二八年壬子 (西曆52)

建武二九年癸丑 (西曆53)

建武三〇年甲寅（西暦54）

王充 都で班彪に師事

※『後漢書』 王充傳

後到京師、受業太學、師事扶風班彪、

班彪卒す

班固二十三歳、班彪の『漢書』完成に着手

◎『後漢書』班彪傳上

（班彪）年五二、卒官、所著賦論書記奏事合九篇

◎漢書敘傳

有子曰固、弱冠而孤、作幽通之賦、以致命遂志、其辭曰、……

師古注、謂年二十也、

（班固 二三歳）

◎『後漢書』 班彪傳上 附 班固傳

父彪卒、歸鄉里、固以彪所續前史未詳、乃潛精研思、欲就其業

建武三一年乙卯（西暦55）

中元元年丙辰（西暦56）

中元二年丁巳（西暦57）

後漢 明帝 劉莊

永平元年戊午（西暦58）

永平二年己未（西暦59）

王充故郷に歸り『論衡』に着手

※『後漢書』 王充傳

後歸鄉里、屏居教授、……著論衡八十五篇、二十餘萬言

※『論衡』自紀篇

傷偽書俗文多不實誠、故爲論衡之書

（王充三三歳）

永平三年庚申（西暦60）

永平四年辛酉（西暦61）

永平五年壬戌（西暦62）

永平六年癸亥（西暦63）

永平七年甲子（西暦64）

永平八年乙丑（西暦65）

永平九年丙寅（西暦66）

永平一〇年丁卯（西暦67）

永平一一年戊辰（西暦68）

永平一二年己巳（西暦69）

永平一三年庚午（西暦70）

永平一四年辛未（西暦71）

永平一五年壬申（西暦72）

永平一六年癸酉（西暦73）

永平一七年甲戌（西暦74）

永平一八年乙亥（西暦75）

永平中

班固『漢書』作成を証告されるも帝の許しを得る

◎『後漢書』 班固傳

既而有人上書顯宗、告固私改作國史者、有詔下郡、收固繫京兆獄、盡取其家書、……固弟超固爲郡所覈考、不能自明、乃馳詣闕上書、得召見、具言固所著述意、而郡亦上其書、顯宗甚奇之、召詣校書郎、除蘭臺令史、……遷爲郎、典校祕書、……帝乃復使終成前所著書、……固自永平中始儒詔潛精積思二十餘年、至建初中乃成、當世甚重其書、學者莫不諷誦焉、

◇『漢書』揚雄傳 傳贊

自雄之沒至今四十餘年、其法言大行、而玄終不顯、然篇籍具存、

後漢 章帝劉烜

班固、文人・學者としては重んじられるも、官としては不遇

◎『後漢書』 班固傳

及肅宗雅好文章、固愈得幸、數入讀書禁中、或連日連夜、每行巡狩、輒上賦頌、朝廷有大議、使難問公卿、辨論於前、賞賜恩寵甚渥、固自以二世才述、位不過郎、感東方朔揚雄自諡、以不遇蘇張范蔡之時、作賓戲以自通焉、

◎漢書 敘傳

永平中爲郎、典校祕書、專篤志於博學、以著述爲業、或譏以無功、又感東方朔揚雄自諡以不遭蘇張范蔡之時、曾不折之以正道、明君子之所守、故聊復應焉、其辭曰、……（答賓戲）

◎『後漢書』 班固傳

固又作典引篇、述敘漢德、以爲相如封禪、靡而不典、揚雄美新、

典而不實、蓋自謂得其致焉、

建初元年丙子（西曆76）

建初二年丁丑（西曆77）

建初三年戊寅（西曆78）

建初四年己卯（西曆79）

建初五年庚辰（西曆80）

建初六年辛巳（西曆81）

建初七年壬午（西曆82）

建初八年癸未（西曆83）

建初中

『漢書』はぼ成る

◎『後漢書』 班固傳

固自永平中始儒詔潛精積思二十餘年、至建初中乃成、當世甚重其書、學者莫不諷誦焉、

元和元年甲申（西曆84）

元和二年乙酉（西曆85）

元和三年丙戌（西曆86）

章和元年丁亥（西曆87）

章和二年戊子（西曆88）

王充、召されるも就かず

※『論衡』自紀篇

罷州家居

※『後漢書』 王充傳

自免還家、友人同郡謝夷吾上書薦充才學、肅宗特詔公車徵、病不行、

(王充六十二歲)

王充卒す

※『後漢書』 王充傳

永元中、病卒于家、

後漢 和帝 劉肇

永元元年己丑(西曆89)

永元二年庚寅(西曆90)

永元三年辛卯(西曆91)

永元四年壬辰(西曆92)

班固獄死

妹班昭『漢書』を完成

◎『後漢書』 班固傳

永元初、大將軍竇憲出征匈奴、以固爲中護軍、與參議、……及竇憲敗、固先坐免官、固不教學諸子、諸子多不遵法度、吏人苦之、初、洛陽令、种兢嘗行、固奴于其車騎、吏椎呼之、奴醉罵、兢大怒、畏憲不敢發、心銜之、及竇氏賓客皆逮考、兢因之捕縛固、遂死獄中、時年六十一、

◎『後漢書』 列女傳 班昭傳

扶風曹世叔妻、同郡班彪之女也、名昭、字惠班、一名姬、博學高才、……兄固著漢書、其八表及天文志未及竟而卒、和帝詔昭就東觀臧書閣踵而成之、

永元中

揚雄の主な作品と年代（類書所引の節録は適宜記す）

*Ⅱ題名のみ見えるもの

▲Ⅱ節録

時代	七略等	自序	漢書本傳	漢書	文選	北堂書鈔	藝文類聚	李善注	初學記	古文苑	太平御覽
漢 成帝	劉向典校 經書、分爲 十六卷 離騷敘	反離騷 廣騷	*反離騷 *廣騷				▲反騷 卷五六		▲反騷 卷六 卷二六		
陽明年間	畔牢愁 惜誦 涉江？ 哀郢？ 油思？ 懷沙		*畔牢愁 *惜誦								
	揚雄賦 四篇	甘泉賦	甘泉賦		甘泉賦		▲甘泉賦 卷二、三九				
	藝文志 詩賦略	河東賦	河東賦				▲皐河東 卷三九				
	奏羽獵賦	羽獵賦	羽獵賦		羽獵賦		▲羽獵賦 卷六六				
	除爲郎、給 事黃門 傳贊	長楊賦	長楊賦		長楊賦				▲長楊賦 卷二二		
	入揚雄賦 八篇			趙充國頌 （黃門郎）	趙充國頌		▲趙充國頌 卷五九				
	藝文志 詩賦略			趙充國傳							
				▲酒箴？ （黃門郎） 游俠傳		▲酒賦 卷一四八	▲酒賦 卷七二		▲酒賦 卷二六		▲酒賦序 卷八九

*この表では、箴、連珠、「琴清英」「答劉歆書」及び「蜀王本紀」等は除く

哀帝 建平四年	入揚雄 藝文志 儒家類	解嘲 太玄序 太玄？	解嘲 太玄序 *太玄	陳遵傳 上書諫勿許 單于朝 (黃門郎) 匈奴傳下	解嘲	▲解難 卷一七	▲解嘲 卷二五	▲解難	▲逐貧賦 卷一八	▲蜀都賦 太玄賦 逐貧賦	▲覈靈賦 卷一	▲逐貧賦 卷四八五
平帝 元始五年以 降◎	藝文志 小學類			*訓纂篇 藝文志								
新 建國五年	入揚雄 藝文志 儒家類	法言序目 *法言？	法言序目 法言	▲元后詠 (大夫) 元后傳	劇秦美新 (中散大夫)	▲元后詠 卷一五		▲蜀都賦	▲劇秦美新 論 卷二一	蜀都賦		
不明								▲覈靈賦				